都名所圖會

平安城
再刻

和書門
二八九九八 號
一一九 函
一 架
六 冊

内閣文庫
和書 類
二八九九八 號
二 冊
一七二 函
一四 架

内閣文庫		
番號	和	28998
冊數		6（ 2 ）
函號		172 175

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

都名所圖會巻之二目録

平安城尾

官者殿祭
大雲院
座頭積塔
宮川 略川の末之
六波羅蜜寺
愛宕寺
五條橋
塩竈井
若子堂
萬寿寺天満宮
猶行平御塚

祇園御旅所
祇園會鉾圖
四條河原夕涼圖
建仁禅寺
姿見の池
晴明社
首途八幡
本覚寺
新善光寺
竹林院
市中山金光寺

四條道場金蓮寺
同山鉾圖
同芝居
蛭子社
阿古屋塚
十禅寺社
御影堂
塩竈山上徳寺
蓮光寺
鬼頭天皇
延寿寺

十住心院 條殿地蔵
手洗水圖
目疾地蔵
六道珍皇寺
焔魔堂
若宮八幡
鏡の池
塩竈社
長講堂
等善寺
夕顔塚

内 一〇八二二號
故紙室藏

雞の池　藍染川　花園稲荷社　俊成卿社
佛光寺　神明宮　大原社　白天神
因幡薬師　繁昌社　朝日宮　神明宮
諏訪社　新玉津嶋社　菅大臣社　五条天神宮
一音寺　壬生寺　同狂言圖　蛭子森
新住吉　荒神社　化粧水　枚語子
天道社　御太刀松　石上宮　朱雀寺
本圀寺 加藤清正墳　人丸社　醒井　西本願寺
醒井　興正寺　常樂寺　東本願寺
東殿　松明殿　稲荷祭礼圖　金光寺
成真寺　判官塚　宇賀社　藪内紹智家
芹根水　月見橋　稲荷社　不動堂
道祖神　稲荷御旅所　蔵王森　寛算石

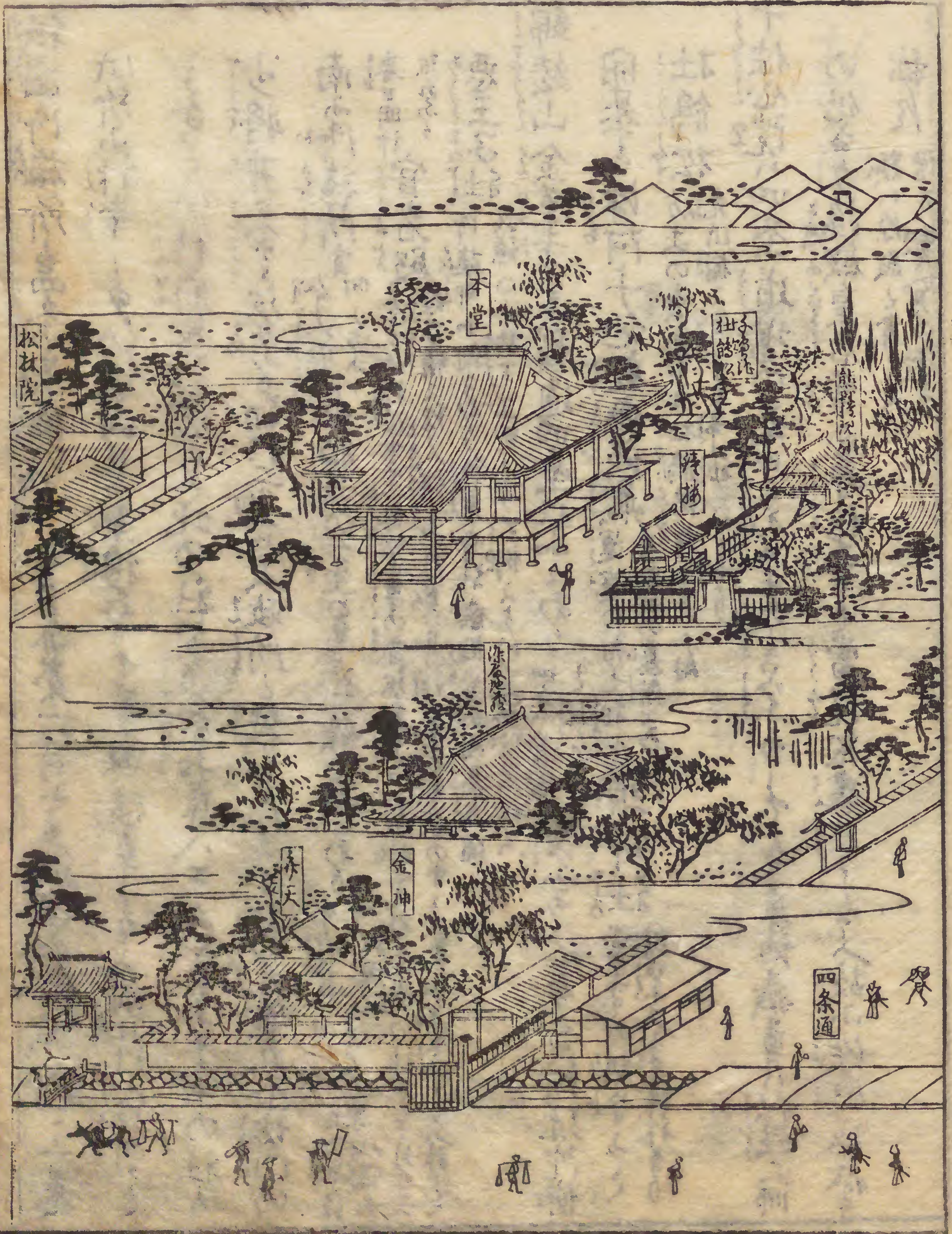
春日森　古御旅　朱雀長者　粟嶋社
古井社　清盛旧地　住吉社　東寺
三鈷松　松子坊松　羅生門旧跡　大通寺
六孫王社　誕生水　満仲公誕生地　歓喜森
福大明神森　人丸塚　嶋原傾城町

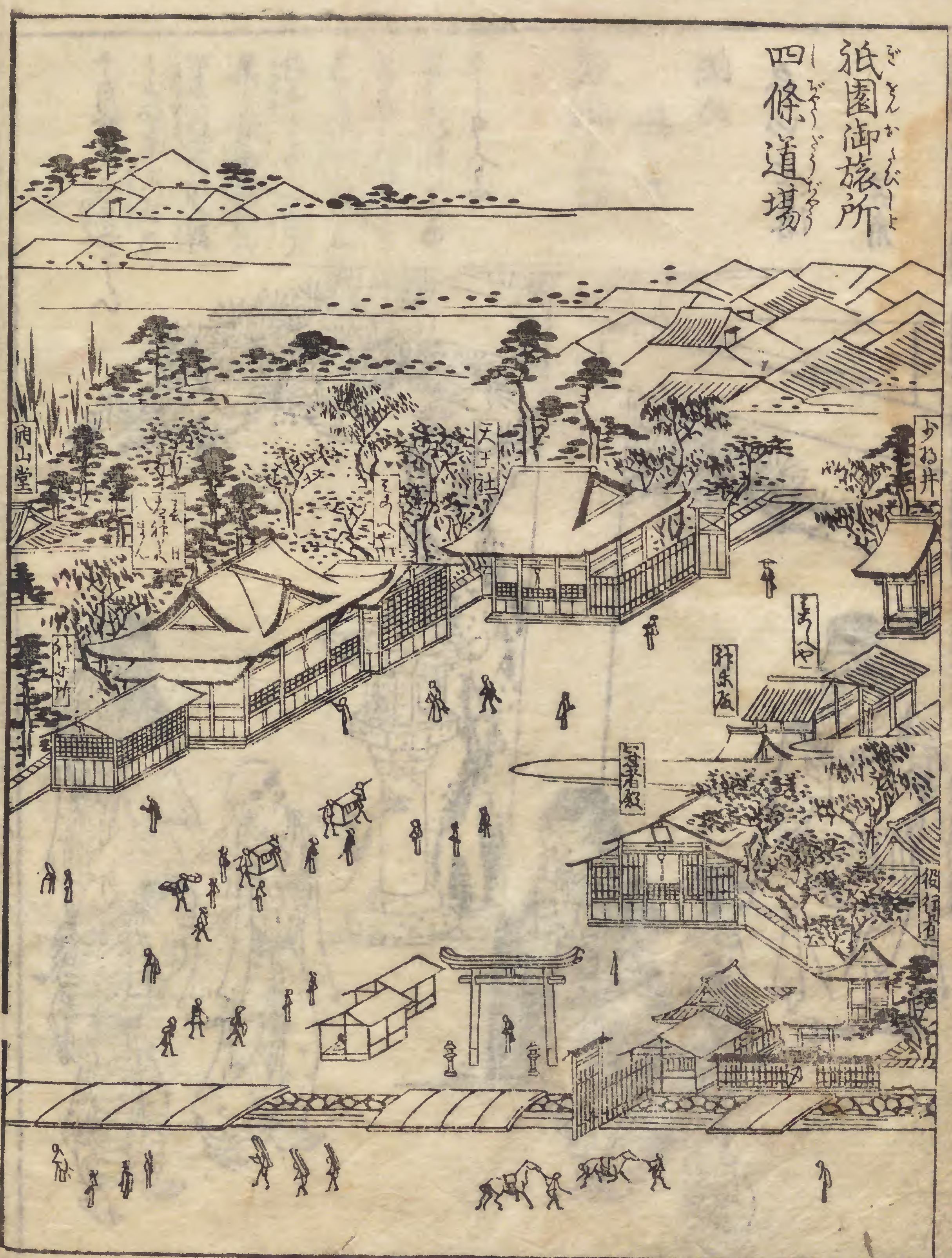
十月廿日ハ誓文ばらひとて四条京極乃官者殿に詣て群集し祇園鴨川の傾城女もおほく来てちかひごとしたるひ又其社より誓文を立て山神ハうれのわすれぬ人々や

傾城らや
都ハ
酒の
ゑひもせず

其角

内 一〇八二二號





祇園御旅所(ぎおんおたびしよ)
四條道場(しじやうどうぢやう)

祇園御旅所ハ四条京極の辻ニあり毎年六月七日祇園會の神輿ハ三基
此所ニ神幸しまひは十四日ニ祭禮ありて本殿へ還幸しかへ両日ハ山鉾とも
ことく此神前を引渡るを北の社ハ素戔烏尊八王子をまつる南の社ハ
少将井天王を祭る初ハ一坐ハ大政所と號してむかしハ烏丸通五条坊門の
南ニ御旅所有 附しいふ 今大政所 少将井の一坐ハ烏丸二條の北ニあり 今少将井町と号く 二坐社 天照大神 八幡宮
春日明神 官者殿 おなかう所神ハ世三土佐坊正尊の霊をまつるといふ又起請文捧の神とて十月廿日の
蛭子講ニ諸人群参す實ハ日の神と素戔烏尊の中をおすしひて誓をまうすの神とも
悪王子社 御旅町小例ニあり祇園會神輿臨幸の時烏丸通
又條の小悪王子町より古例ニより此祇園ニ御旅所を
錦綾山金蓮寺ハ京極通四条北ニあり 四条道場と称ス 時宗ニして本尊ハ阿弥陀佛
開基ハ浄阿上人也 親鸞地蔵 運慶の作也 初ハ 多田公の墓所あり 熊野社 當寺の鎮守なり 時宗の守護神なり
杜鵑松 方丈の東ニあり杜鵑洛陽ニ来る時 先此樹ニ至りて啼初るとなり
十住心院ハ四条道場の南口ニあり真言宗ニして本尊地蔵尊ハ弘法大師
の作なり染殿皇后常ニ尊信ありて當院を建立しあへ故ニ染殿地蔵と
称ス 額ハ染殿と書して 僧正賢賀の筆也

龍池山大雲院ハ京極四条の南にあり浄土宗にして智恩院に屬す本尊阿
弥陀佛ハ恵心僧都の作なり開基ハ貞安上人なりむかし安土論の時浄家の宏
才にして信長公厚く帰依し給ひ江州八幡に西光寺を建立して貞安をすへて
住職とす時に信長公御父子明智光秀が為に生害し給ふ故貞安上人帰洛して
急ぎ京都に登り二条烏丸の邊に房室を構へ上人ことごとく御菩提を弔ひ其後
秀吉公の命によりて天正の末に織田信忠卿追福のため當院を草創し給ふ此
卿の法名を大雲院殿三品羽林仙巖居士と称し當院の號是に出る信長公信忠公田向塔所あり
信長公安土に御在城の時貞安上人に七種の奇物を賜ふ今當院の什寶とす其中
に法然上人の一枚起請文あり又一休和尚の筆なる奥に繪讃ある圖ハ達磨大師
の後向の画なり其讃に曰

達磨悟りよりとやら人あらば胸にゐやうと
ゐんでいふもぬれなぬれ事のう事

九年までさせんするおそむやくなし誠の時は弥陀の一声

御寺所さ画　一休判

祇園會の祭式ハ例年五月朔日より致齋あり四条御旅町に桙を立る是ハ華
表の旧地なり同廿日の吉符入より鉾の町々にハ囃子初あり神輿洗ハ同晦日にして
御迎挑灯煉物の行粧艶々しくして洛東の賑ひ也六月朔日ハ鉾の児祇園へ参りて
祭物ありしハ騎馬にて其行列花麗を尽し高貴の住来に似たり五日ハ鉾の
引初にて六日の早天より六角堂に来りて山鉾の行列前後の鬮取あり此日の夕方より
宵宮錺とて山鉾ともに今日のごとくかざりを挑灯かゞやき連て夜ふくるまで囃子ありて
貴賤の群集いはん方なし七日ハ祇園會とて卯の刻より山鉾列を乱し四条通より
京極を南へ松原を西へ引渡す又此日神輿の祭礼ハ未の刻にして感神院より御
旅所へ神幸あり又八日より十四日の山鉾の営ありて十二日の鬮取あり十四日
の山鉾ハ三條通を東へ京極を南へ四条を西に引渡して神輿の祭式ハ御旅所より
四条を西へ東洞院より神輿ハ南に引別れて後五条の西大旅社にて同列し
三条を東へ還幸し給ふ同十八日にハ御輿洗して晦日に等し祇園鴨川のかはらに
竹葦の如く群をなせり　山鉾の圖ハ二十七基ある今國例祭古實の次第ハ祇園會細記に
くハしくのせたれバここに略す

国立公文書館
National Archives of Japan

鉾に
乗る
人の
きほひも
都哉
其角

祇園會

山鉾は祭式にありしへを
なかしも異ありて山傍の定
鉾太合人の山車踊等所て
の跳鉾家をれ笠車風流
れ造り山八撥舞楽など
いふありて荘も麗微あり
今は和漢の錦繍をまとひ
七宝を鏤めへ瓔珞荘厳えに
して天下第一の奇観とも
いふべし

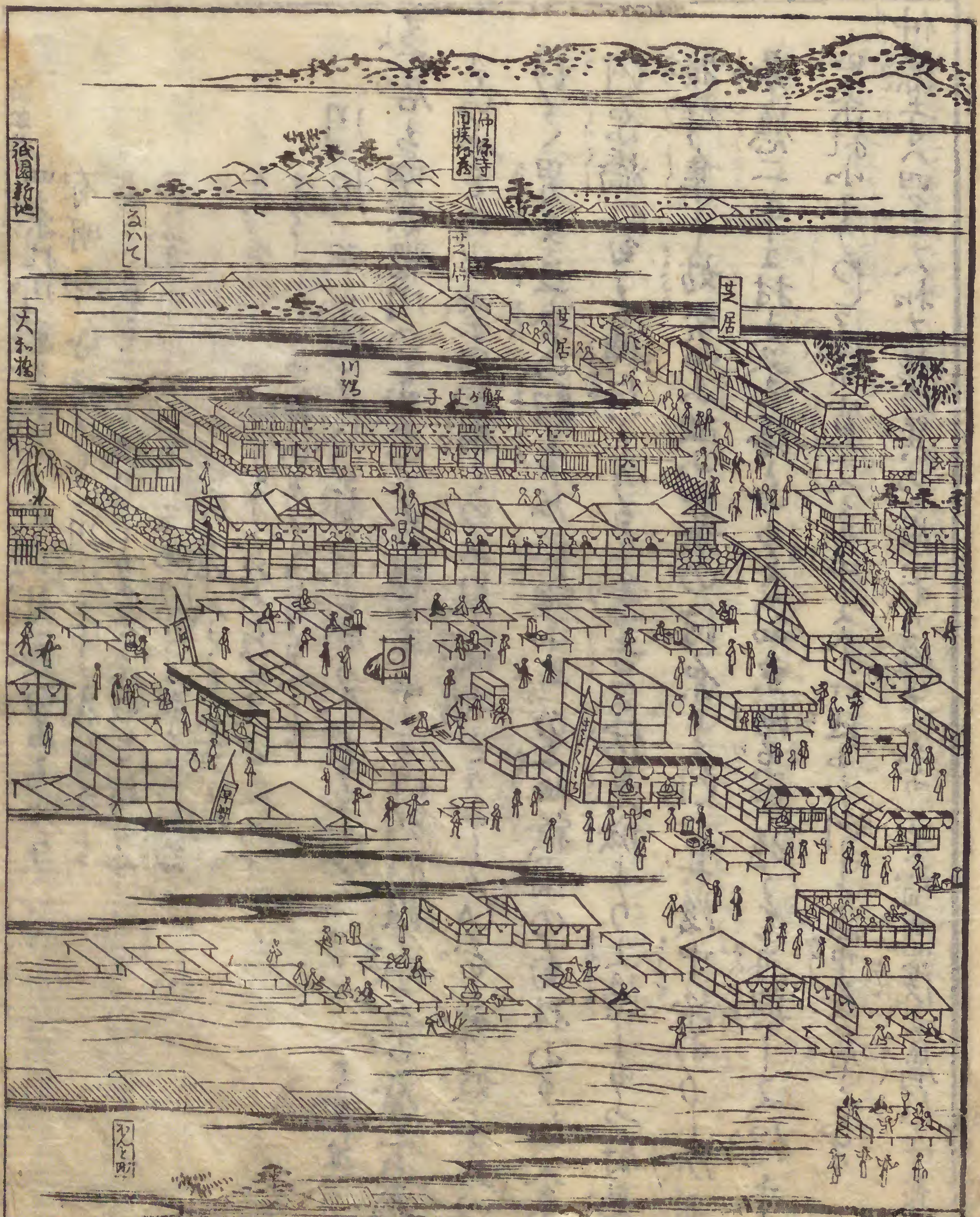
家集
かさたされ
山るれ鉾の
長き日に
神の園をも
てらすらん
為家

手洗水ハ
烏丸通錦
小路北にあり
ありむかし
大政所町に
祇園神輿乃
御旅所ありし
とき系治の華
ちてふそ手水
并し今
此例によれり

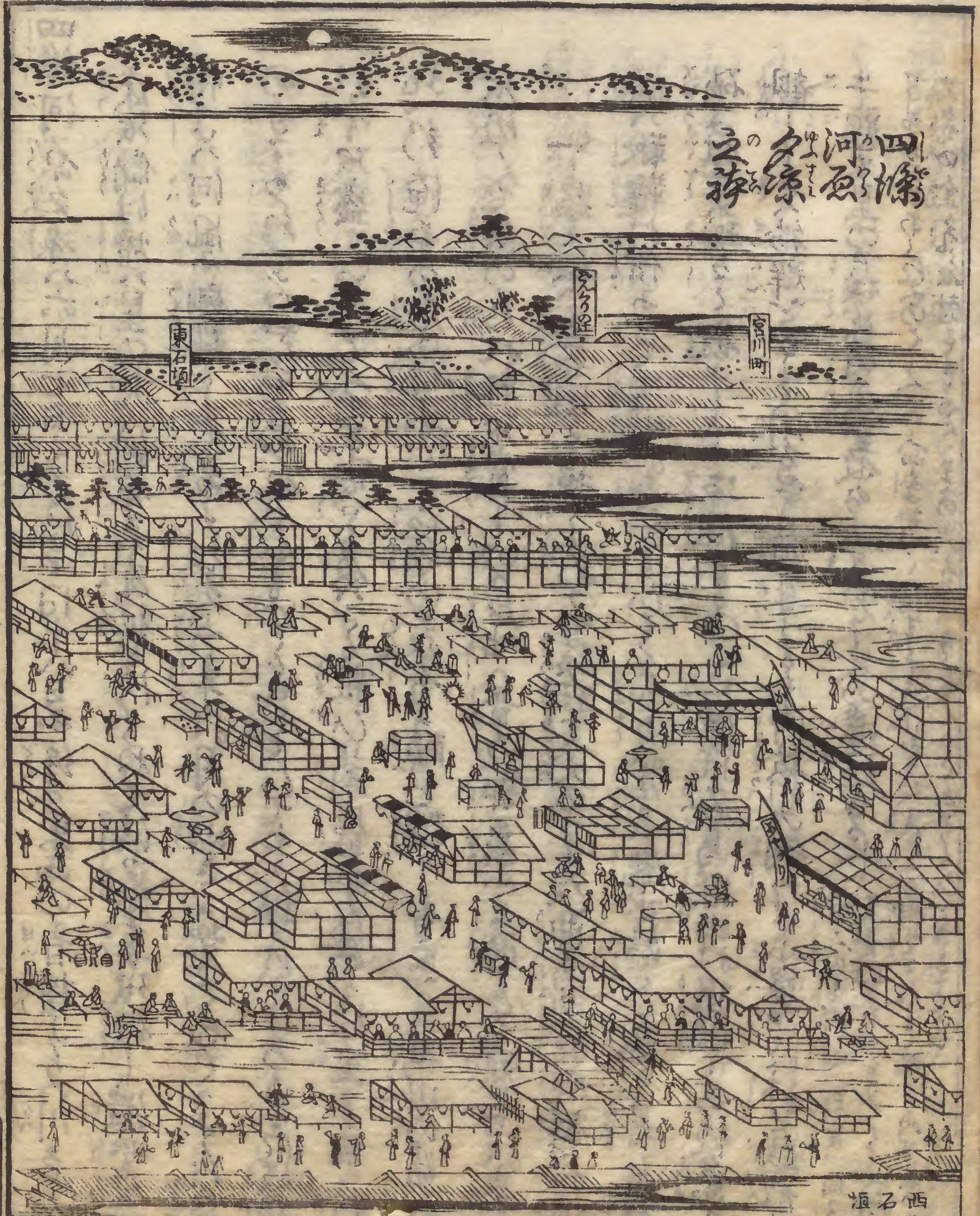
今も六月
七日より
十四日まで
井あり
ありて
手水所と定めし
凄冷なる
清泉にて
比類なし
此水を服すれハ
疫を のぞくとぞ

座頭積塔といふハ人王五十八代光孝天皇の姫宮雨夜内親王御眼盲目ありて
よく洛中の女の盲者を召して御伽をせさせ給ひし賤きものハ官をたまハり御前
に伺公させられし人ハ御前といひし風儀よりそれより男子の盲人も官を給ハりて
座頭と称す検校勾當の官をはじめらる此内親王よりの遺風なり
毎年二月十六日ハ此姫宮の御祥忌なれバ座頭集りて供養をなして尊敬を
拝し東の河原に出て石を積で報恩とす是を積塔といふ又六月廿四日にも
集會をなすこれを座頭の納涼といふなりこれも則御弔ひなりとかや
今ハ高倉通五條坊門の北に集會所ありて二箇の積塔あり此に會して
琵琶を弾じて平家をかたるなり旧例をもつて此法事を勤るなり
又雨夜内親王の墓ハしれず後ハ凍飢のものをあはれみ給ひ不便に
おぼしめされ洛陽のた女牛に長屋をたてゝ住せ給ふ今京都の者のあまねく
ゑいハおめくらとて杖にすがりて通ふといふハ此花女牛の目くらといへるなり
ありとぞ
雨夜内親王の御事王代の系圖に分明ならず後考をまつ

四條河原夕涼ハ六月七日より始り同十八日に終る東西の青樓より川辺に
床を儲け燈ハ星の如く河原にハ床几をならべて流に宴を催し濃艶の
帽子ハ河風に翩翻として遊客の目を奪ひ美少年の月のぬきえに押もどし扇
のかなめにてみやびやかなれども心もいそぎをぞせんびをろうする妓婦
れ今を盛といふべく芙蓉も及ざる粧ひ蘭麝の匂ひやかに薫て南へ行
北へ行滝亭の店に体をやすむへハ山家の花香の酥を醍し香煎又ハ鴨川の流れ
を汲んで京の名の軽きを賞しかるに咄ハ晋の郭象にも勝きて懸河の水を
注が如し物まねハ函谷関をも押しぬる猿狂言犬のすまふ曲馬曲独楽麒麟の繩
渡ハ鞦韆の俤ありて嗩吶の聲かまびすしく心太の店にハ瀧水滴々として暑を避
硝子の音ハ珊々と鈴して涼風をまねく和漢の名鳥深山の猛獣もあつまりて
観に供へ衆群をなして川遊び宴をするも御祓川の例にして小縄を張り神を退散し
牛頭天皇の蘇民将来に教たまふ人の遺法なるべし
昔大内裏の時ハ群臣一同う朱雀門にあつまりて年ごとに（四季）おこなはれし大祓なり
せしむ名をあらため年中の祓を損せしむる造化ある故なるべし夏の名の祓を損せせんとして秋の川へ流さんとも
火気の鎮氣の事なる故夏の火氣を損せせん火をあふらるゝひとつのならひとすとかや



祇園新地
仲源寺
目疾地蔵
芝居
大和橋
川端



四條河原夕涼之躰
東石垣
宮川町
西石垣

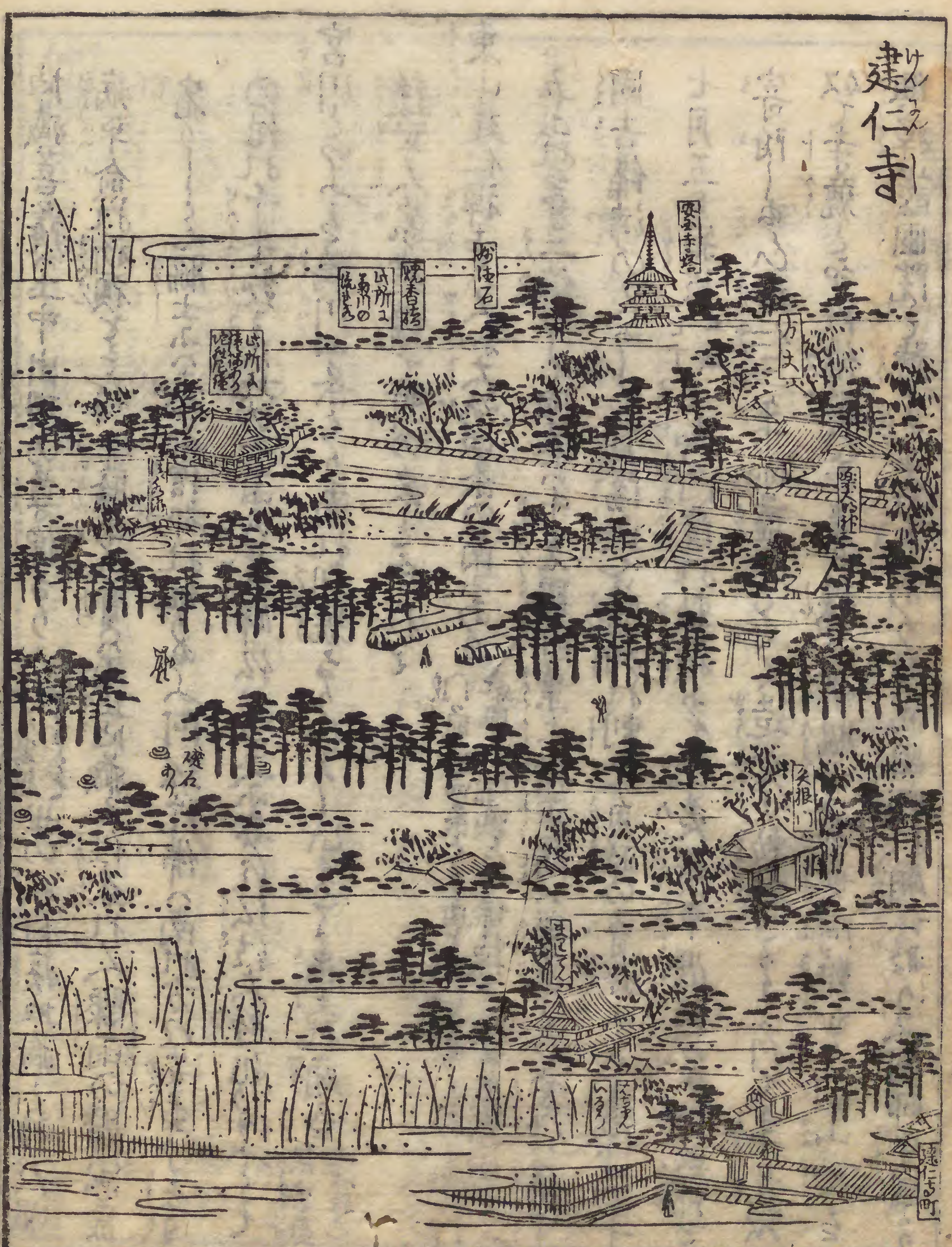
四条の川原すゞみとて夕月夜のころより
有明過る頃まで川中に床をならべて
夜すがら酒のみものくひあそぶ女ハ
帯のむすびめいかめしく男ハ羽織
ながう着なして法師老人ともに交り桶や
かぢやの弟子子まですそとしぐらひの
さすがに都のけしきなるべし

川風や薄かき着たる夕すゞみ　ばせを

芝居ハ四条鴨川の東にあり永禄年中に江州の浪人名古屋三左衛門
といふもの出雲のお国といふ風流女とかたらひ舞妓となづ
け男女立合の狂言を仕組小歌の本林祇園の西林にありし又五条
河原橋の西にて興行しけるを秀吉公伏見城より上洛しける時見
物群集し妨になる故に四条の河原にうつす其後中絶ありし所に
承応二年に村山又兵衛といふもの四条河原中嶋にて再興し又縄手
四条の北にうつし遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる
仲源寺ハ四条大和大路の巽の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊

地蔵菩薩ハ土中出現の尊像なり一説にハ定朝の作なりとぞ世の人目疾地蔵と称す眼
病平愈の祈願をかくれバ霊験あり實ハ雨止地蔵也往来の人驟雨の時此堂に
宿りしとぞ脇士にハ恵心僧都の作りたまふ阿弥陀佛ハ南の方に安置し薄目
の作の千手観音ハ北の方に薬師仏ハ方丈に安す弘法大師作りたまふとぞ
宮川といふハ鴨川四条より南の別號なりむかし此邊に禹王の廟あり（洪水を鎮むる為）
後世人家建續て町の名となれり
東山建仁禅寺ハ大和大路四条の南にあり（門前通四条より南を建仁寺町とよぶ中の門の南より竹垣とて此代りに是を建仁垣といふ）
五山の第三位にして開基ハ千光國師葉上僧正諱ハ栄西といふ其先ハ備中
國吉備津の人にて賀陽氏也薩州の刺史貞政の曾孫とぞ建保三年
七月五日寂す（七十五歳）土御門院の勅願にて征夷将軍源頼家卿敷地を
寄附しめ建仁二年伽藍をことごとく造営し勅願によりて年号を
以て寺號となす佛殿の本尊ハ釋迦佛脇士ハ迦葉阿難なり開山塔を
興禅護國院と號して東の丘にあり栄西國師の廟塔なり又國師宋國より

方丈
佛殿


建仁寺（けんにんじ）
方丈

帰朝の時携へ来りし菩提樹ハ當院にあり今ハ絶て殺株となる又河原院跡ハ佛殿の前に二ッの鐘堂あり東の大鐘ハ是融大臣六條河原に殿舎を建られし後に佛閣となし河原院と号く此所にありし鐘也荒廢の後鴨川七条の南の深淵に沈む栄西国師是を窺知りて官吏に訴え求て當寺に揚る此鐘の沙汰を引上る時更に動かず故に国師ハひとりとして力者の音頭に栄西と唱え国師ハ弟子長首座と呼んで引揚しむ教のごとく力者大勢栄西を気負揚してやすく當寺にうつす（今重き物を引上此名を呼で運送するハ此所謂なり又鴨川七条の南七町に釜が淵といふあり此鐘の沈みし所也實ハ鐘が淵なり）又此鐘毎夜子の時より殺九十聲撞之晨鐘ハ八十聲之合て百八撞之昔ハ陀羅尼經を誦して撞しゆへ此鐘の音を称して建仁寺の陀羅尼といふ池を法水池と號し中門を立門と呼ぶ（平家の一門門脇教盛卿の館の門なりといふ）禅居庵にハ摩利支天を安置し應暦二年唐土より将来せし霊像也（常に信人多し）應験新にして妙依石（方丈の）焼香橋（八小の石橋）楽神廟ハ国師の勧請にして當山の鎮守也（佐中玉吉依漆方丈の前三祈来）是より正傳院にあり則有楽翁御前を知るなり安国寺塔（方丈の）織田有楽塔の数寄の座あり

六道
珍皇寺
薬師堂
西福寺
六道の辻
不動
姿見の池

六波羅蜜寺
本堂
阿古屋塚

蛭子社は建仁寺門前にあり祭る所蛭子命栄西国師勧請し給ふなり
建仁寺境内の産沙
とし例祭は九月十六日

等覚山念仏寺は六波羅蜜寺の西にあり むかしは此辺を愛宕里といひしを今は此名は當寺に止りて世人愛宕寺と称す
真言宗にして開基は弘法大師中興は千観内供なり本尊観世音千観の作
なり左右の脇士は毘沙門地蔵尊千観内供自作の像を安ず此人姓は橘氏
相模の刺史中納言頼顕卿の子なり幼名を千観丸といふ成長して叡山運照
内供の室に入て出家し顕密の碩学となりて一世の間常に六字の仏号を
修する事止事なし故に念仏上人と呼ぶ又堂内に地蔵尊を安置す此
像を火伏地蔵と称して毎歳正月二日経を読て諸人火伏の札を出す又星
を天狗車寄松と称す 千観内供法会の時此車に乗して往来し 此松に車の轅を寄しとぞ

普陀洛山六波羅蜜寺は六道の西にあり真言宗にして智積院に属す本尊
十一面観音は立像長さ丈空也上人の作 西国十七番の札所又洛陽観音巡の其一なり 傳へ曰
村上帝御宇天暦五年に疫癘時行て死るもの数多し空也上人これを

憐みひ十一面観音の像を作りて車に乗せ洛中を自ら牽ありき給ひ又當寺
本尊の観音に供ずる茶を病人にあたへ給へば日ならず平愈す村上帝是を
吉例として毎歳元三に服し給ふ万民今に此例を行ひて名を王服と
號し年中の疫を免るゝとぞ 北の方は地蔵尊を安置す いにしへは此尊像を本尊とす 六波羅の地蔵堂
と号す康頼の寶物集に曰東山に貧しき女ありけり年来此地蔵尊を信じける此女年老たる母を持
かゝるありけるを母死して女ちからなく葬んと案じ煩ひ居たりける程にある法師来りて
乃僧と人出来て何となく取したゝめて事の子細をありのまゝにかたり
ける僧もわれしらずそ侍るなれとて去しゝと立てゆく北面にうつれ給ふて
いへおくりし其當しかじかと此女嘆きさらにうたがひありしぞされは則六波羅の地蔵の
為ありけるとて参りて拝しまいらすれば地蔵の御足に土おほくつけてぞおはしける
まよりして此地蔵をば山をくりの地蔵とも申すまた老母の髪を持て居給へば
かけの地蔵とも号しける

南の方は薬師仏を安置す傳教大師の作 又開山堂は空也上人自作
の像あり次に姿見の池は上人ここにて姿を映し自像をきざみ給ふとぞ

阿古屋塚 本堂の北にあり又条坂の遊女阿古屋が塚と云 上に
無縫の石塔あり是は平家の侍悪七兵衛景清のやしろあり
空也上人いせ参の時此所にて念仏の法を
弘め給ひけるよりこれも仏舎利をそ
弥陀の名を空しくなしたまへば我此世の罪とならんかし

上人あれ紙かうて
拾遺　世の中はくるしきものを雨やどりつかのまの住家は来世なりけり　空也上人
一聲もまことあるよ佛ちかひ人の耳にのこるのはなし　仝

珍皇寺ハ建仁寺の南松原通にあり 六道と号す 本尊薬師佛ハ傳教大師の作にて開基ハ慶俊僧都中興ハ弘法大師 篁堂ニハ小野篁の像を安置す 此所冥土へ通ひし道なりとぞ 焔魔堂ハ東の方にあり 迎鐘ハ七月九日十日参詣の人此鐘を撞て聖霊を迎ふ むかしハ六道辻 前にあり 本堂の 當寺ハ久代平安城の葬所なり 桓武天皇延暦十三年に長岡より此京にうつし世の人の葬所を定め給ふ由遷都記にみえてより又紙愛宕といふ 源氏物語に桐壺の更衣を此所にて葬るとかや 長者官領 いにしへハ弘法大師の聖跡として東寺の しけるとかや今ハ此所の東にあり河海抄にハ 建仁寺の塔頭大昌院の兼帯所とする

北斗堂ハむかし六道の東弐町斗にあり北辰を祭る本尊にて高燈籠をかけゝり城南淀川の舟船運送の目当に常に夜燈をとぼしける熊野の深山にも北斗の星の曇るを祝ふ是応仁の兵火にかゝりし 一年金森宗和江府より上洛の時清水寺に請て此灯籠の倒れて苔に埋しを寺僧にうけ五重の寄物として今はその御節にあり

晴明の社ハ宮川町の東松原の北にあり古へ此地に安倍の晴明の塚ありしが新道の人家が開に及んで次第に塚崩れて平地となる故に小社を建て其霊を祭る

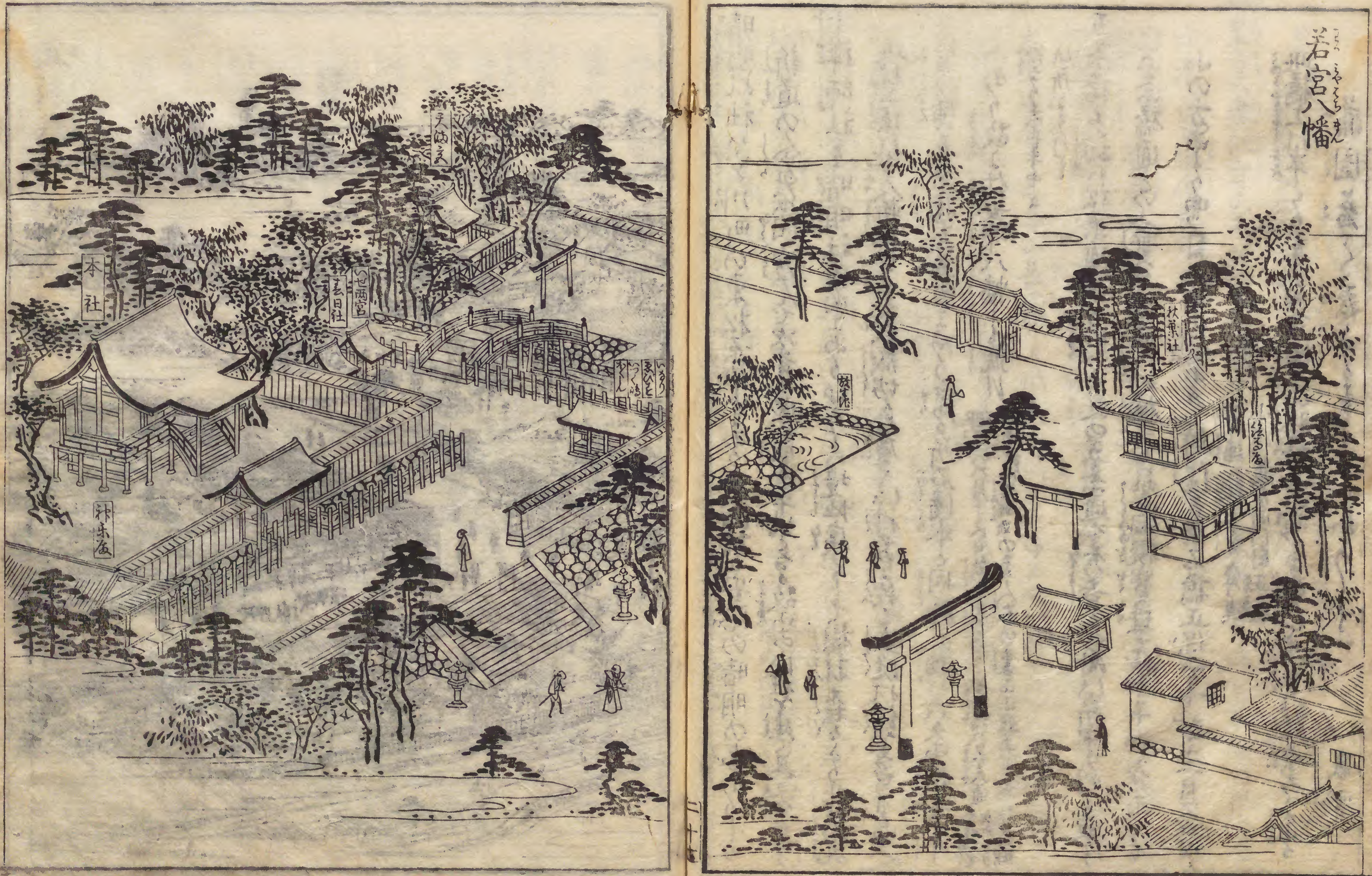
十禅師社ハ晴明社の南にあり むかしハ境地廣くして樹林森々たり牛若丸此林に隠れ千人斬ありしとぞ 武蔵坊弁慶も此神前に於て主従の約をなせしとぞ

若宮八幡ハ五条橋東五町にあり祭る所石清水と同神也 初ハ六条佐女牛にあり故に佐女牛八幡とも号す 例祭ハ八月十五日放生会あり 舊地ハ若宮通 今の鍵屋町なり 六条今の奥柳通の西人家の裏に小社ありて其旧跡なり 天正年中に此所に移りしと

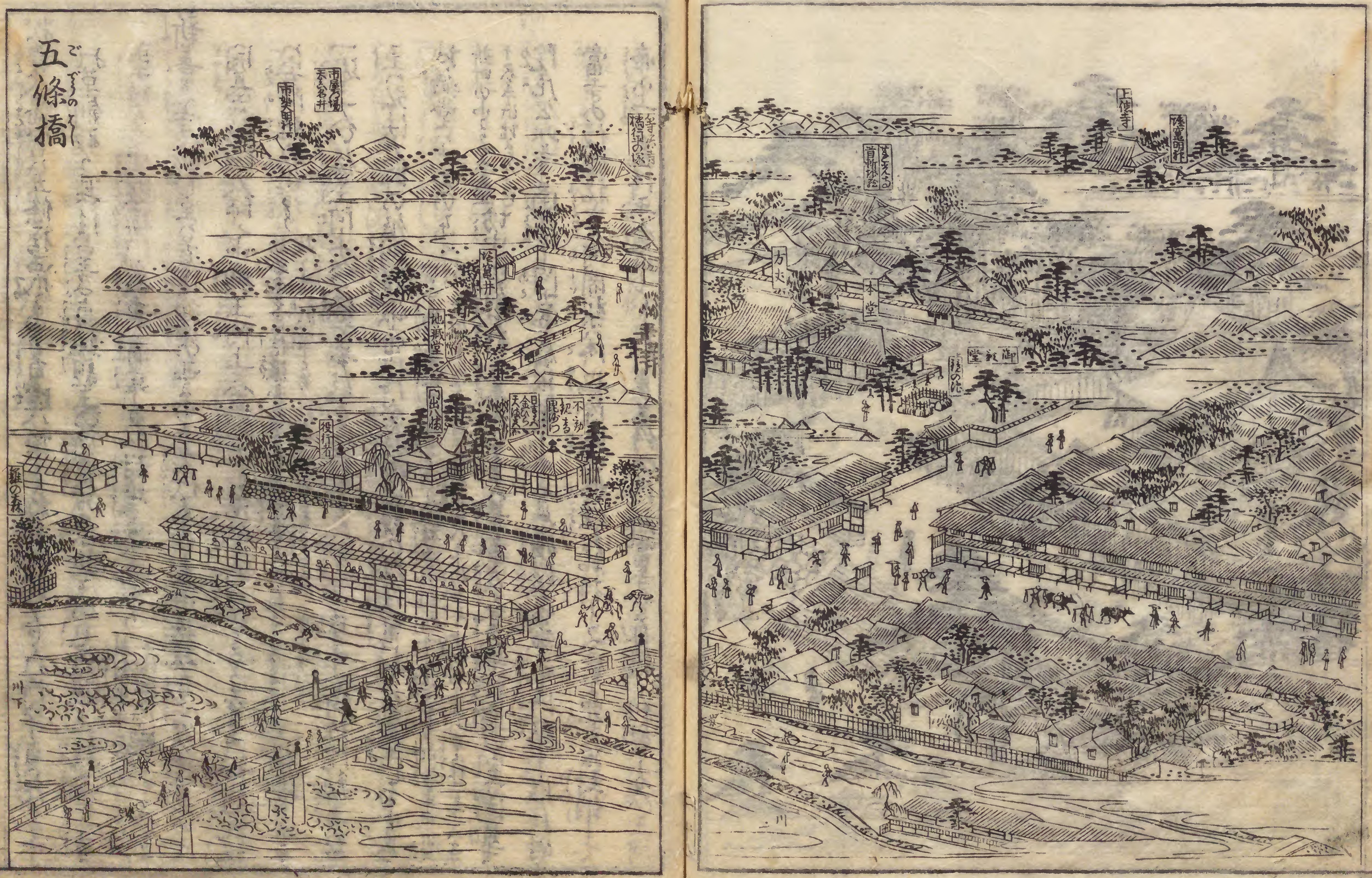
五条橋を初ハ松原通にあり則いにしへの五条通也秀吉公の時此所にうつされたり故に五条橋通といふ實ハ六條坊門也欄干に紫銅擬寶珠九ツあり十六本ありて北の方西より四ツ目に橋の銘あり　雒陽五条石橋正保二年乙酉十二月吉日
奉行　芦浦観音寺舜興
小川藤左衛門尉正長

此橋上の半より東に向へハ洛東の勝地木の間くに顕れて平安の佳景あるに止る

蒲團着て寝たる姿やひがし山　嵐雪


若宮八幡
本社
春日社
いせ両宮
天満宮
神楽所
放生池
秋葉社
絵馬屋

五條橋



松豊八幡宮ハ五條橋西にあり首途八幡とも称す清和天皇の御宇貞観年中
此草創なり具ハ後白皇子貞純親王の御霊なる親王の息六孫王経基公尊
崇ありて宮殿楼門巌重に再建せし封境広大なり 外封ハ十二門ありしかるに平清盛の代滅亡して今纔なり
新善光寺御影堂ハ首途八幡の西にあり久代天長年中檀林皇后の建立にて
開基ハ弘法大師也中興王阿上人真言宗成後て時宗にうつる本尊ハ阿弥陀仏
ハ安阿弥の作なり 初の本尊ハ信濃国善光寺の如来をうつし作りて本尊とせしに 故に御影堂と号す今坊中若干に安置す 脇壇にあり
一遍上人の像王阿上人の像を安す古来の本尊ハ光三尊にて阿弥陀観音勢
至ハ弘法大師の作則嵯峨帝の御念持仏也鏡の池塩竈の井ハ本堂の西にあり
地蔵堂ハ方丈の東也 当寺始ハ東洞院春日にあり檀林寺の別所にて尼寺なり永安年中に炎上して東河原院よりうつるを応永廿八年佐女牛室町の北よりうつる享禄二年又条新町の北よりうつる又天正十九年此地にうつると
坊中に扇を折て業とする者昔より多し平敦盛の室蓮華
院尼公此寺に閑居し阿古女扇を製しける其頃後嵯峨帝御悩ありけれは
当寺の住職祐寛阿闍梨ハ御悩除滅の修法を加持し又扇に呪文を封納して
帝に上る即御平愈ましましけれハ皇子行の御所当寺を再興し剃髪ありし八王河

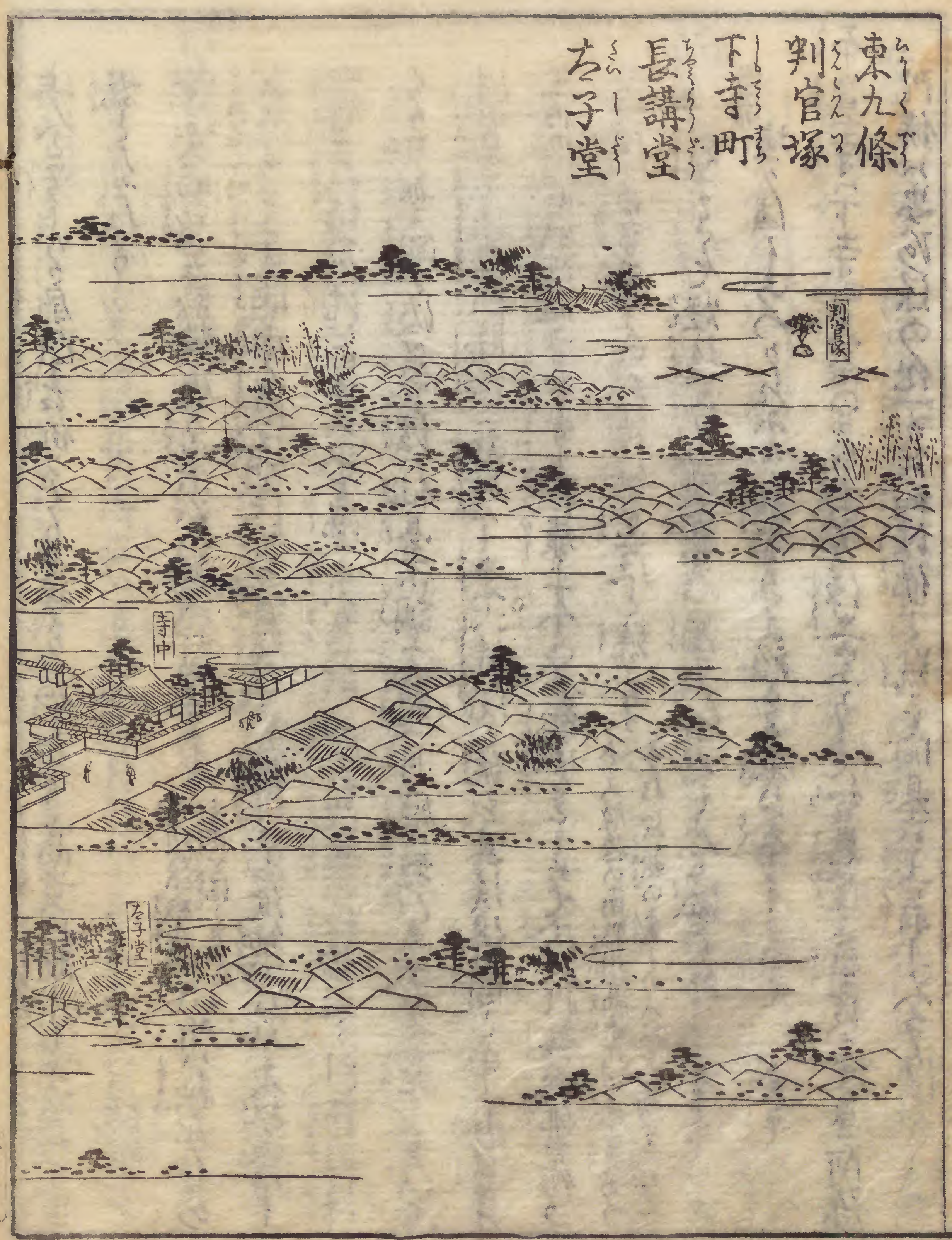
上人と号しける扇ハ吉例よくなりて世々名物となり高貴の献上として都鄙に賞
翫となりけり
河原院の旧地ハ五條橋通万里小路の東八町四方にあり 鴨川ハ此殿舎の庭中を流しとかや 此所ハ融左大臣の
別荘にして台閣水石風流を尽し遊蕩の美を擅にし山水築ては草木繁茂し
四時の花絶ず池を堀ては水を湛へ魚鳥ハ波に戯れ陸奥の松島を移し那波浦
より日毎に潮を汲せ塩竈の烟ハ仙臺に調文籍ハ月殿に翫び又大臣薨じたまひて
後寛平法皇此勝地に遊覧し東六條院と號す其後仏閣となし融公第
三の御子祇陀林寺の本主仁康上人ハ知識をもとめて丈六の釈迦仏を作り
て此院に安置しまつる依て河原院と號しける 今五條橋の南鴨川高瀬川の間に森ありこれを籬の森といふハ河原院の遺跡之

古今
君まさで煙絶にし塩竈の浦さびしくも見えわたるかな 貫之

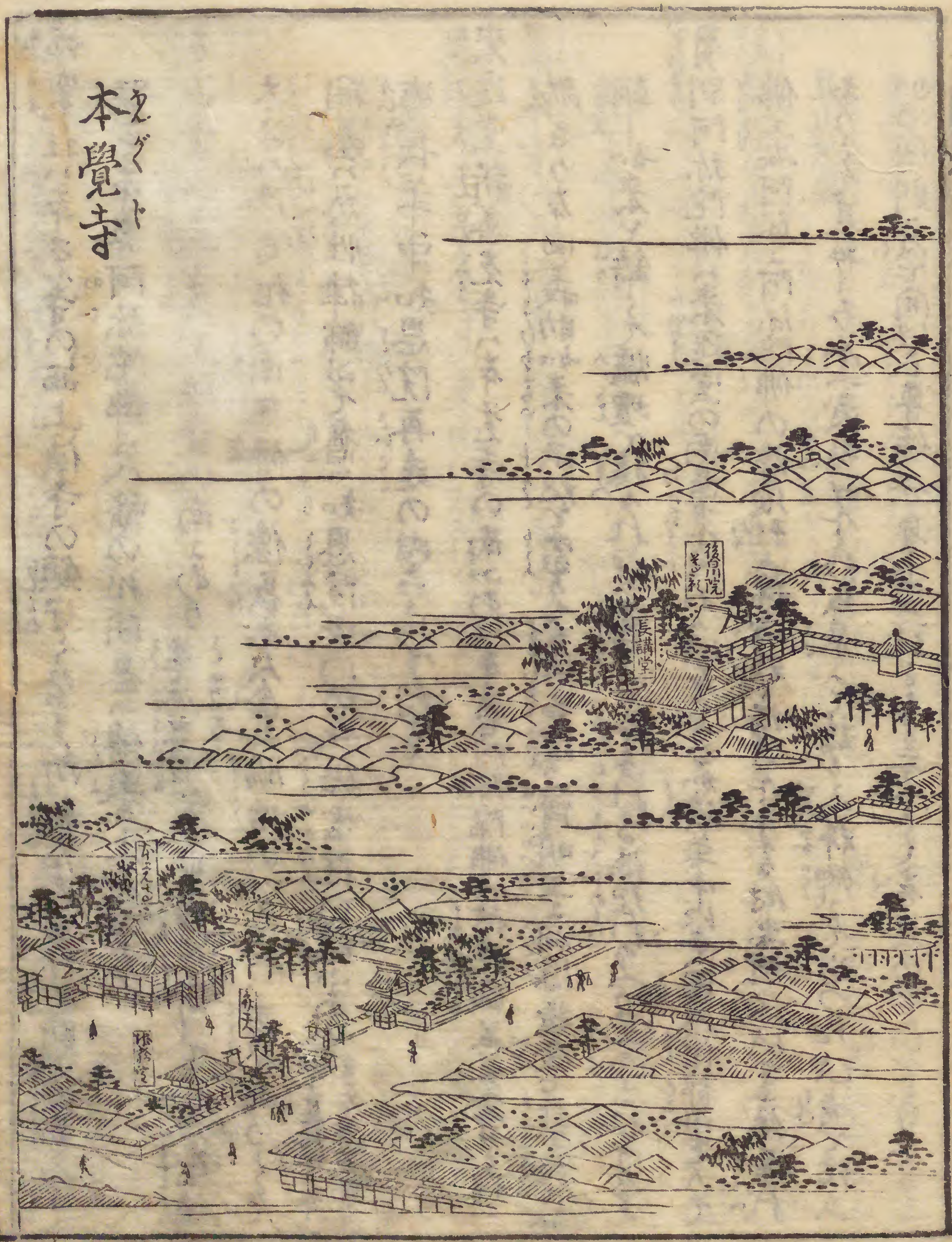
續後拾
塩竈しいつくれぬ秋のきまて露とる宿ハ家にあらん 業平

本覚寺ハ下寺町五条の角にあり浄土宗にて智恩院に属す本尊阿弥
陀仏ハ安阿弥の作一名ハ如法仏と號す開基ハ玉翁上人なり

東九條(ひがしくでう)
判官塚(はんぐわんつか)
下寺町(しもてらまち)
長講堂(ちやうかうだう)
菓子堂(くわしだう)



本覺寺(ほんがくじ)



塩竈社ハ本覚寺の西上徳寺の鎮守となる所融左大臣にして則塩竈と号し、
號を本尊阿弥陀佛ハ八幡の作開基ハ傳譽上人なり
太子堂白毫寺ハ上徳寺の南にあり 速成就院と号す 宗旨ハ律宗にて本尊聖徳
太子ハ御自作の南無佛の像長ケ三尺余之脇壇の四天王ハ唐仏なりとぞ
開基ハ忍性律師にて舊ハ知恩院中門の北浩玄院の後にあり 今其地に古井あり太子水と號す
慶長年中知恩院再建の時ここにうつすとぞ
來迎堂新善光寺ハ本覚寺の南にあり本尊阿弥陀佛ハ信濃國善光寺と同一
躰なり本田義助如来の示現を蒙りて百済國へ渡り齊明王に閻浮檀金七斤を給て
朝し如来を鑄んとて爐壇を構られハ其光中より分身せる像現れ出て是を當寺の本尊とし
負別阿弥陀佛ハ来迎堂の南蓮華寺にあり此本尊ハ嘉禎年中に東國の僧都によりて
佛工安阿弥に阿弥陀佛の像を彫せ像成就し帰らんとする時安阿弥此尊像希代
なりとて悲歎しみ今一度拝せんと彼僧を慕ひて趨る山科郷にて追つき此旨を語ルに
かの僧則笈を開けて尊像分身して二躰となる二人とも奇異のおもひをなし

東西に負ふて別る其地ハ今山科の負別といふ安阿弥の負帰りし像を當寺に安置すといふ
馬止地藏 當寺にあり此尊像ハ土中に埋れし時平清盛駒に乗りて通りける途中に止て進ず依て不思議を感じて掘しむるに此像出現せり是より上ハ六条河原の斬罪の場にありしとぞ
後白河法皇此處の來迎堂の南長講堂にあり當寺ハ法皇の御建立にして時々御
幸ありて貴賤を論ぜず叡聞に達する亡魂を名帳に記しめし常に御回向ありて御講
を修しめ玉ふ所ハ故に長講と称す 平家物語に曰それ後白川法皇の長講堂の過去帳にも妓王妓女佛刀自等が尊霊と四人一所に入られけり
萬年寺の天満宮ハ長講堂の南にあり初ハ間之町万年寺通の南にありしとぞ 舊地に小祠あり古木残せり
鬼頭天王ハ本覚寺の東南竹林院の堂内にあり 正安二年の春後伏見院小山に御幸ありし時小面若京と云ふ重清供奉し朝影と以官女とうち初連理の契をなさんとおもひしが制せられて又八重姫と云婦人に胡蝶ふかく嫉妬水食を断て死せり重清菩提をとむらひ出家し逐に其二鬼を結ひ苦楽坊と號し時に朝影が亡魂鬼女と現し苦楽坊の頭を撫れバ忽平愈をなし功ありて共に成佛し末代其證として頭をのこし鬼頭天王と號しける
播行平卿塚ハ竹林院の南等善寺にあり
市中山金光寺ハ時宗にて本尊阿弥陀佛ハ定朝の作開基ハ空也上人之 初ハ堀川七条の北にあり今の本願寺境内なりむかし此地貴人の市場なりしより市屋道場といふ
市比賣社 當寺にあり弘仁五年八月十二日 天眞井 本堂の西にあり洛陽の名水之
延壽寺ハ金光寺の南にあり本尊ハ大日釋迦弥陀三尊共銅佛定朝の作之 初ハ中小路五条にあり今ハ金仏町と云

夕顔塚は五条にあり
今は堺町松原北にあり
源氏物語にある夕
かほのおはし所に住
給ひし跡なり

新古今
夕顔をよめる

白露のなさけおきける
ことのはや
ほのぐみえし
夕顔の花

前太政大臣

籬の池は高倉五條の南宗仙寺の堂前にある井をいふ舊河原院の封境にして
其遺跡なり當寺は曹洞宗にして開基は天江和尚本堂の額は正水山と云ぞ
藍染川は五条高倉坂経て間之町より人家の下を南へ流て濁水なり是も河原院の名跡といひ傳ふ
花開稲荷社は松原通高倉の西にあり稲荷町といふ此所は松永貞徳公翁が居所にして
俳書御傘坂撰を
古宅玄春といふ人の坂五条花開の家にうつりてそ

家集
おのがうへ坂門の松にみそあれる宿は若葉よあるかの郷 貞徳

五条花開の宿に會ありし夕白坂
小車のしばしとまれと立よりて夕顔の花 仝

又条の宿にて夢想稲荷の社は道をとほる
旅人の此花さかりの陰まきて此所むかしの花と
ところそいひ傳へたるとおもへ坂なりて

日
萬代をこの川のやしろは君秋は花さかえつゝのれてとはそらかな 仝

俊成卿の社は松原通烏丸の南人家の後にある所五條三位俊成卿の霊之此所は卿の宅地なりとぞ

新古今
千載集えらび給ふ時うたへ人の夢をつげて
行末は我をも忍ぶ人やあらんむかしをおもふ心ならひに 俊成

佛光寺
阿弥陀堂
本堂
集会所
玄関
六坊

汁谷山佛光寺ハ五條坊門通にあり初ハ興正寺と号ス宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして佛光寺
派と称ス本堂にハ開山親鸞聖人自作の御影を安置ス坐像にして長三尺余阿弥陀堂本尊
ハ立像の阿弥陀佛を安置ス長三尺一寸八分是ハ定朝大師の作也此本尊ハ後醍醐天皇の御宇に
盗賊寺内に乱入し尊像を奪ひ逃るといへども重くしてもち方なく二条河原に投棄て
去ぬ其夜より瑞光を放て帝闕を映照し百官これをあやしむ帝光の行来を尋
させ給ふに弥陀の光明なり勅使驚て尊像を帝に奉る宮中に安置ス其後興正
寺に遷座し寺号を佛光寺と改て勅額を給ふ又宸筆を染られて親鸞聖人の
絵詞傳を書しめ玉ひ専修念佛の棟梁たる綸旨を給ふ阿弥陀堂の脇壇にハ聖
徳太子自作の木像法然上人自作の像を安置ス餘間に存覚間といふ本願寺
第三代覚如上人の息存覚上人かつて寓居し六要抄四部九帖等を撰しるふま
當寺の草創ハ親鸞聖人四十余歳の時山別山科郷東野村に建立し興正寺と號
し徒弟の上足真佛上人に附属しまひ其後五条西洞院九條殿下兼實公の別荘
花園亭を聖人に寄附して花園院と号し興正寺の院號とるせり 九十四代の帝花園院の御時園跡

恩ありしむ後醍醐帝の御宇元應元年に當寺を以て今比叡行中座汁谷に移さと
東ハ阿弥陀峯を限り西ハ柳原に至り今七条の辺南ハ今熊谷を限り北ハ汁谷大路に
至る其後足利尊氏公の祈願寺として佛供田を寄附しあまた宗門繁昌
し尊信れ僧俗諸国に充満し塔頭四十八坊に及べり然るに文明年中當寺十四世
の住職経豪上人山科本願寺蓮如上人に属し寺僧四十二坊其外国々の門徒
数輩随順ス故に経豪上人ハ舎弟経誉上人當寺の住職として十四世を相續
ス所在の六坊今寺内にあり秀吉公の時大佛殿建立ありて此地に移さと
四條之寳ハ四条通東洞院東をいふむかし大内裏の時此所法品報商ハ市
場也今毎朝高倉四条の北に野菜の市立往古の餘風也
神明宮ハ綾小路高倉の西にあり本ある所伊勢内外太神宮なり
大原社ハ綾小路新町の東にあり本ある所伊弉冊尊なり丹別桑田郡大原社と同神也
膏薬道場といふむかし四条の南新町と西洞院の間にあり今膏薬辻子といふ
白天神社ハ東洞院と烏丸の間高辻の北にあり所之辻子といふ清香庵と號を

因幡薬師
不動
大黒天

西の坊
不動
阿弥陀
角の坊

因幡堂平等寺は松原通烏丸にあり寺務は天台聖護院御門主寺僧は真言宗なり本尊薬師如来は立像にて長五尺二寸碁盤の上に在す脇士は日光月光十二神八菩薩を安置し傳記に曰く此本尊は天竺祇園精舎四十九院の内東北の角療病院の本尊にて等身旃檀木の像にして釈尊みづから刻みし聖容なりしかの伽藍破壊に及んとする時東方さして飛去り給ひ一條院の御宇長徳二年因幡国賀露津の海面に夜々光あり国司橘行平卿漁人に命じて網をおろさしむ海底に潜しむるに光明赫奕たる薬師仏を引上奉る其後七年を経て長保五年四月七日に行平卿の居館烏丸高辻に自然として飛来し給ふ 後光厳座は因州より上りし時座光寺と号して今にあり 則館を佛閣に造りて安置し給ふ今の因幡堂是なり本願は行平卿の息光朝禅師なり別寺務となる承安元年四月八日高倉院より勅額をたまひ平等寺と號す永暦二年には後白川院此所に幸し給ふ今の堂は足利義教公の再建なり橘行平卿の木像は堂内西の間に安置す東の間には夜叉神を安す 後堂に井戸あり火災の用なりとぞ 鎮守は後白川帝の院宣によりて十八所社と

勧請す 後に神託ありて蛭子神一所を加ふ故に十九所なり 観音堂の本尊は慈覚大師の作愛染明王弘法大師を堂内に安置す鐘堂は本堂の西にあり常に注連を張る 毎年二月十九日は初鐘供養あり一日之此日に注連を引するなり恒例とぞ 執行薬王院には大黒天を安置す 當院は祇園御旅所将井社と兼帯にて毎年六月七日此所より見ゆる 歓喜天不動明王を安す桃の坊柳坊には稲荷氷室秋葉社之社をまつる又虚空蔵を安置す西之坊には金毘羅を安置す桂芳院には稲荷社あり又不動役行者を安す長伯寺は裸形阿弥陀佛を安置す慈覚大師二條の后の願によりて女人成佛の證に作りたまふ金堂の阿弥陀佛は春日の作なり 京極誓願寺とは称す 又粟嶋明神妙見菩薩を安す角の坊には稲荷大明神鎮座す又當寺の本尊は日本三如来の 信濃善光寺 嵯峨釈迦佛 其一にして釈尊在世の尊像也御戸開あるときは勅会の法事音楽等ありて厳かなり代々の天子御厄年に當らせたまふ年は毎月勅使参向ありて御祈祷あり是を薬師詣といふ繁昌社は高辻新町の東にあり祭る所弁財天女也 今真言の僧此を収する 當社門前町の産沙神とし祭は九月廿日也

朝日宮ハ白山通 今の麩屋町なり 五条の北にあり祭る所天照太神なり清和天皇の御宇貞観年中倭姫ノ御告により丹波国桑田郡穴生村に造営しぬ其後正親町院御宇元亀二年此所に遷座し 元亀ハ九月十六日 猿田彦神石 社内にあり霊験あらたなし 飛梅天満宮 末社六ヶ所の内にあり太宰府飛梅の古木を蔵む 剣菅家の額あり

神明宮ハ富小路五条の北にあり古此辺ハ融大臣の殿舎なり封境にて此地を伊勢太神宮遥拝所と後世なりて社を建る 今ハ右門日といふ 今も言ひ伝ふる

諏訪社ハ五條の南一町諏訪町にあり祭る所信濃国諏訪社と同神なり 獣肉を喰ふもの此社の神楽をうけて食せば汚穢なしとぞ

新玉津嶋社ハ松原通玉津嶋町にあり祭る所衣通姫にして紀州玉津嶋と同神なり後成卿の勧請也 文治六年十一月十二日也 為家卿若年の時此社に毎月六度づゝ百首のおもひをなしけり

新続古
たのむぞの和歌ふかつゞれ跡もちぢり紀しぬ玉津嶋姫　前太政大臣

菅大臣社ハ五条坊門西洞院にあり祭る所天満天神にして則菅丞相是善卿の館跡なり祭礼ハ八月十六日拝殿の額天満宮と書る 竹内御門跡良尚法親王の筆也 天満宮降誕之地 八分字の石表あり書者鳥石の筆なり

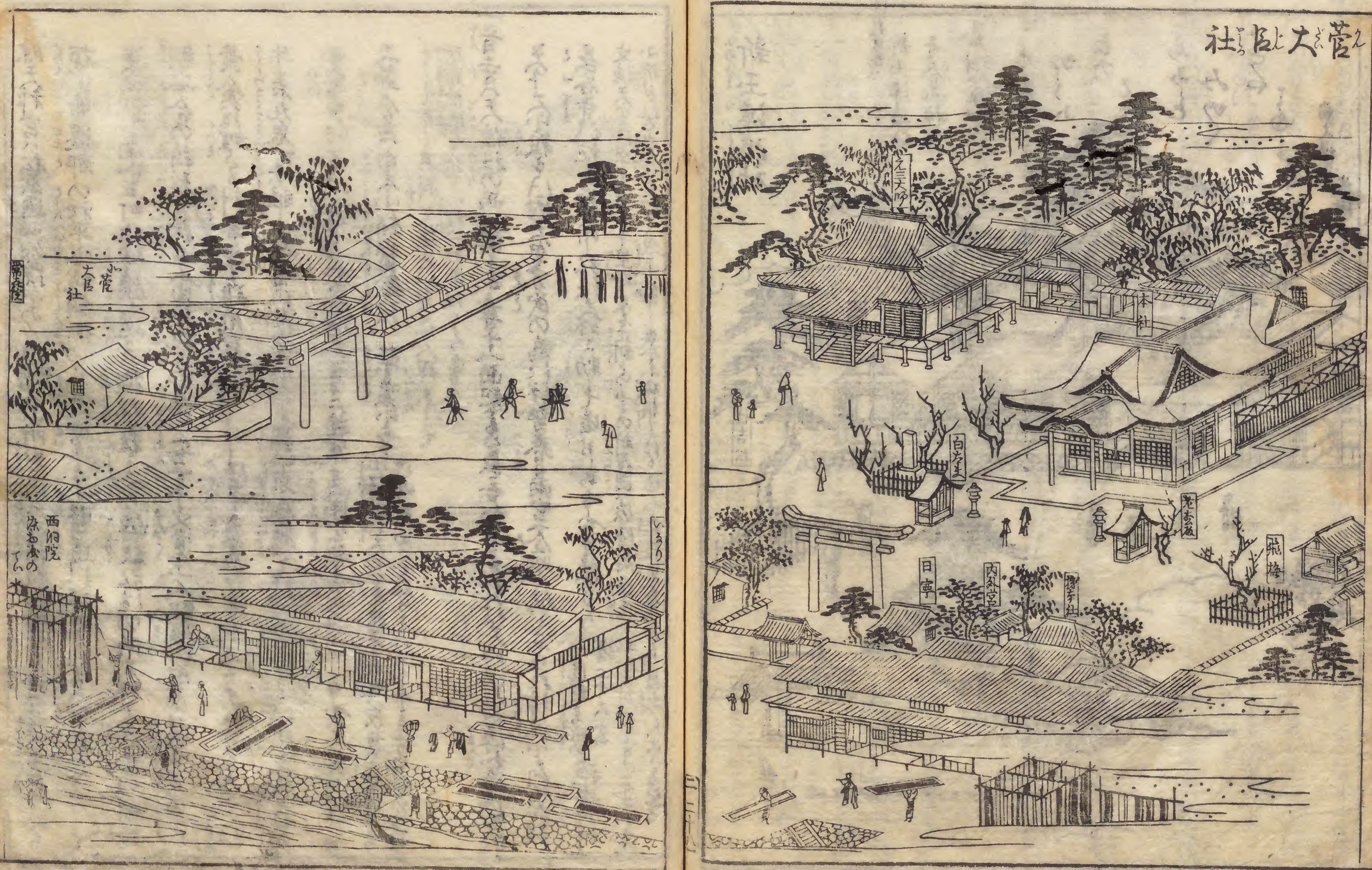
誕生水 本社南の垣の内にあり 鳥石碑の銘を書ける 大師堂 元三大師自作の像を安置す 榎本社 近年上冷泉家よりあらためて勧請し給ふ

北菅大臣 菅大臣の北門にありて祭所菅相の御子なり 常喜院 北菅大臣の西に隣る荒木天満宮堂内に安置 金剛力士堂あり

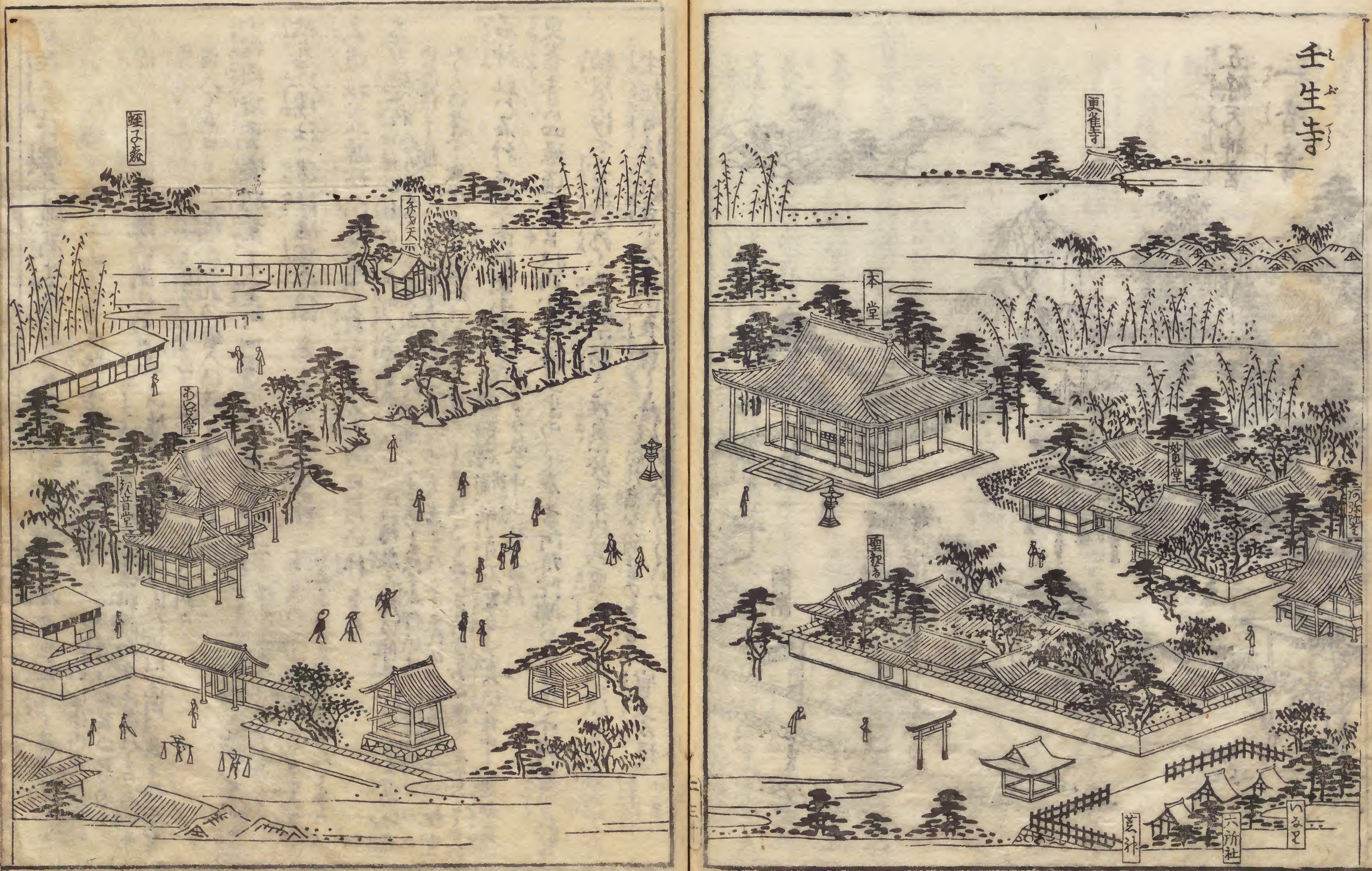
新玉津嶋社

新後拾
新玉津嶋社哥合に神祇
玉津嶋まもりやひさし云のえれあふぐもみかくちかやともらん
前大僧正光海

菅大臣社



五條天神宮ハ松原通西洞院ニあり天使社と称す所ハ彦名命相殿ハ大己貴命なり
桓武帝遷都の初平安城鎮衛の為造営し給ふ医道の祖神にて古ハ宮殿巍々として
東西四町南北五町の神領也巡りハ樹林森々たり伝教弘法の両大師も入唐の時帰
朝安全の祈念を修す由社記ニあり承安二年文覚上人配流の時当社の鳥居の下に
黄金坂埋むる計略にて難風を免れしとぞ源平盛衰記にみえたり安元元年ニハ源
牛若丸鬼一法眼と兵書の遺恨ありて戦ひ忽感応を得て打勝しも此所なり又武蔵坊
弁慶にあひしも此森とぞ至徳元年ニハ将軍義満公殿舎を再建しあるハ九月十日
又節分ニハ白朮小餅宝船を　禁裏に上る　小餅料ハ天文二年将軍義輝公の母公慶寿院より許状並ありて縮るそれより今に至り公務の沙汰
として年々具料を帰ハ此夜法人群集して
厄難除滅を祈る三種の神物なりとぞ
一音寺ハ天使社の西に隣る本尊十一面観音ハ長二尺七寸にて弘法大師の作也淳和帝御宇に
天下大に疫病ありて万民の為に伊勢春日両宮へ奉幣使を立られ神託によりて和州
長谷寺の観音をうつし弘法大師ニ勅して造らしめ給ふ尊像なり　洛陽観音巡の疱瘡神　第二十八番
文徳天皇御宇天安二年星野某左正利といふ人の新羅国へ渡海の時疱瘡を悩む正利当寺の本尊を念
じ祈りければ応験ありて忽平癒し安全に帰朝し其法人疱瘡安康のため具を出しけるとぞ


壬生寺
更雀寺
本堂
六所社
いなり

新住吉社ハ醍井通高辻角にあり祭所ハ摂州住吉明神之像成に勧請しまつるとぞ

荒神社ハ醍井高辻の北にあり文禄年中摂州勝尾山より勧請す 近衛河原清荒神最初の地なり

化粧水ハ西洞院四条の南にあり いにしへ此所に小野小町の別荘ありしとぞ これより三間半北に四条通人家の下を西へ流れ西洞院川へ落る溝川あり

藍染川とハ小野小町にまよひ添かけし人本意をとげずして此川に落入て死せしとぞ故に婚礼の嫁入此橋を通る事を忌

小松内府重盛別業を室町四条の南西側にあり 一説ニ大納言公任卿の旧跡ともいふ高楼あり近年まで清水今にあり

松恵比須社ハ猪熊通松原の北にあり祭所蛭子神 当社の什物に龍香寺大同年の九字の名号あり十月廿日にまつりを出す

天道社ハ五条坊門猪熊の角にあり祭所日月の神なり

太刀懸松ハ此條猪熊の西新町人家の裏にあり古此所ハ伝教大師の開基し給ふ天台の伽藍なり 此所に住し源義経此寺に宿し給ひし時の住僧より投つけし太刀此堂前の松に懸りしより名とせり 五十七代の此所道珍僧都親鸞聖人の弟子と成堂舎ハ應仁の兵火に焼亡し其後寺を西六条御堂前に遷して金寳寺と号す

石神社ハ石神通三条の南にあり 祭所 豊石窓命 奇石窓命 之古ハ此地中山忠親卿の亭なり故に中山社と称す

更雀寺ハ四条通大宮の西にあり浄土宗にして本尊阿弥陀仏ハ恵心の作 中将實方朝臣勅をうけて奥州にくだり其妻に逢ずして陸奥に於て卒す其霊雀となりて此寺の森に棲く住主観智法師ハ是に哀みて故に雀森とも称す 此地旧ハ大内裏の勧学院の地なりしとぞ 實方塔 寺内にあり

壬生の大念佛ハ中興の
開山圓覚上人よりはじ
始り毎年三月十四日
十日十夜本堂において
修行す亡者の中
種々の狂言ある事を
しるす愚痴蒙昧
の輩勝縁を
結ばしめ菩
提の道に入しめん
がための方便
なるべし

桶とられ狂言

壬生寺ハ五条坊門朱雀の東にあり宗旨ハ真言律にして和州招提寺に属す本尊ハ地蔵
菩薩ハ坐像長三尺にして定朝の作也当寺の草創ハ一條院御宇正暦二年にして
開基ハ三井寺の快賢大僧都之(姓ハ藤氏にて粟田関白道兼公の支族なり智證大師に随身なして天台の奥義を究む永承十六年十一月十六日寂すと)
地蔵の尊像彫刻の志願を発し佛工定朝に命じて一千日の間に彫り終る相好
圓備なして恰生身に向ふが如し是当寺の本尊なり又持物の錫杖ハ落慶の日本尊の四方
旁添くして異香薫じ音楽幽に聞へて聖衆来迎の如し午の外に及んて漸旁晴たり
本尊を拝されハ忽然として六輪の錫杖を持しまさせ又本尊なるある夜化度にし錫杖ハ釈尊
伽羅陀山にて延命地蔵経を説給ふ時地中より出現すると告給ふ当寺の最初ハ草堂にて
此本尊ハ安置有寛弘二年に堂供養ありて小三井寺と号し其後御法院御宇建保
年中に和州前吏平相国宗平本尊の利益を蒙りて堂舎僧坊悉く造営し此時ハ
寺を宝幢三昧院と號し又地蔵院とも称す白川院鳥羽院後白河院順徳院など
も信敬ありて行幸ありしとなり当寺の縁起に委し中興ハ圓覚上人(和州服部の産にて後京極に来る)
大念佛 圓覚上人より始る毎年三月十四日より廿四日に至る種々の猿楽をなし是を壬生の狂言といふ 壇供 毎年正月ゟ法人是を請て撰殿を称す

本圀寺

大光山本圀寺ハ堀川松原の南にあり法華宗にして一致派なり開基ハ日蓮上人にして
初ハ相州鎌倉松葉谷に建立ありて法華堂とよばれ一宗最初の精舎なり称
日蓮上人姓ハ三国氏 聖武帝の苗孫なり 父ハ遠州の刺史貫名重実が次男なり 母ハ清原氏之
貞応元年二月十六日午の刻に房州小湊浦に誕れて十二歳にして同国清澄寺に登り真言
を学び十八歳にて落髪し名ハ是生と號し後に自日蓮と改む幼稚より才賢にして常
に虚空蔵を祈りある夜の夢に老僧来りて手に明星の如くなる宝珠を授けんと夢みてより
して一を聞て十を悟れりかくて諸宗にいたりて南都北嶺にいたる園城に入りて学窓に蛍
をあつめ倩諸宗の議判蒙昧を歎しかくて又は蔵経を披きけるに諸経中に最第一の金言
にいたり衆生成佛の根元なる事を知り建長五年二月廿日三十二歳にして朝日に
むかひ合掌し始て南無妙法蓮華経の七字を唱清澄寺の南面にして一山の僧且外
守護職東條左金吾景信等とあつめて法花を演説し論釈の議文をあらはされ
諸宗の僧徒風に木葉の随が如し是一宗流布の濫觴なり弘長元年五月平重時
これを妬で伊豆国伊東浦に左迁せらるあり附相州竜口の江にして誅せらるべしとて

敷革の座しめくりて天俄にかきくもり震動して太刀取眼くらミ剣段々にをれたり相模守
大に驚き死をゆるしめぐりて又文永八年にハ佐渡の国に流されたまひしかどもつよく天災あり
ければ赦免状をもちて偈に助りてより宗派海国に限なく流布し遂に相模守も貴
敬し上人ハ文永十一年五月に鎌倉を出て甲州身延山に入て艸菴を結び春ハ朝に花
を折て佛に供し秋の夕へハ山月を詠て経書を照し又ある時ハ夜の雨の窓におとづれたまへハ
むかしハ都にある為ハあはれ風おそふる宮をとふらひしとそ
後宇多帝の御宇弘安五年十月十三日武蔵国荏原郡池上右衛門宗仲が家にて遷化したまへり 日蓮上人 行年六十一歳
鎌倉松葉谷の法華堂を日朗に附属し又日印より住し日静の時勅願所となり貞和元年
光明帝の勅によりて相州鎌倉より洛に上り六条堀川に移る 此地古ハ六条判官為義の館の跡 義経もこゝに居せしよし平家物語にあり
本堂ハ法華経を本尊とす 日助僧都一字 これの額也 立像堂にハ釈迦佛を安置す 豆州伊東の海底より漁人の網にかゝり
てそ出現し 祖師堂 日蓮上人の影其外日朗日印日静日像の影を安ず 此寺ハ 鬼子母神十羅刹
八条戒光寺の薬師堂より尾に戒光寺の跡あり 刹堂 [illegible]
方丈 妙法花院と称す 此寺初ハ江州安土にあり 画ハ狩野[illegible] 人磨社 [illegible]
永源の寺額ハ水戸黄門光圀卿の筆なり
皐諦石 一名祈願石ともいふ 方丈の東にあり 鴛鴦曼陀羅 日蓮上人の筆 [illegible]

佐女牛の井ハ醒井五条乃南にあり井筒に銘あり

佐女牛井

文和二年
百楽再建之

足利将軍義政公茶道に寵せられしかバこの水を愛しゆへとぞ今ハ用るものもなく草茂り井筒も埋みかくされけれども泉をむかしからさん滴出る李白が讃に

石甃冷蒼苔
寒泉湛月明

されバこの清泉にいふべし

本願寺ハ西六条にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法なり聖人の傳ハ末巻華頂山ニあり 剃髪影堂の所ニあり 当寺の草創ハ亀山院御宇文永九年聖人の息女覚信尼公 日野左衛門佐廣綱卿の室なり 勅を蒙て洛東大谷に始て廟堂を建立し 開山滅後十一年に當る 亀山院勅願所として龍谷山本願寺の號を賜ふ第二代如信上人 開山の嫡孫善鸞上人の息にして覚信尼の猶子 其頃奥州大網郷に居住の故に覚恵法師 廣綱の子母ハ覚信尼第三代 覚如上人 大谷の留主職となり其より覚如上人第三世を継で後伏見院正安元年に勅願寺となる此綸旨を賜ふ第八代蓮如上人の時宗義大に繁昌し宛も開山の在世に超ゆへ山門の衆徒これを妬で寛正六年に当寺を破却けれバ寺門三井の流法ハ蓮如上人に荷擔し近松寺に寄附し聖人の影像を此に移しまいらせ蓮如上人ハ小国を経回し越前吉崎に御堂を営北陸七州を化益し其後文明十一年山州山科郷に影堂を建立し第九代實如上人に紅衣を賜ふ第十代證如上人の時御堂を摂州大坂石山に十一代顕如上人の時二品親王の勅書を賜り御門跡の號を勅許しありて又御堂を紀州鷺森にうつし又天正十九年八月に六條堀川に移さる 委ハ信長記拾遺にあり 本堂ハ開山親鸞聖人自作の影像を安置し 此像ハ開山在世の時彫刻しありて息女覚信尼公へさづけ給ひし聖人の滅後遺骨を細

西六條
本願寺北御門前

掛りて像にあり彩色剥落せり故に骨肉御影と称す坐像にして長さ二尺八寸余なり本堂ハ大谷本願寺のうつし紫宸殿拝領より御堂造りハ紫宸殿の摸形也堂前の高欄ハ内裏にほし南北の脇壇北ハ前住大僧正其外歴代の画像を安ず餘間にハ九字十字の名號並安ず寂如上人の筆也毎年報恩講七昼夜の法会あり阿弥陀堂本尊阿弥陀佛を安ず 八幡の御傳壇上にあり 立像長三尺余にて春日の作也脇壇北ハ高祖聖徳太子法然上人の画像を安ず上人の御讃也 当御門主法如 集会所 法会執行の時衆僧の宿所とす 轉輪蔵 一切経を納む額ハ寂如上人の筆なり 撞鐘堂 鐘ハ古へ太秦広隆寺にありて少納言信西入道の銘あり 鼓楼 此太鼓ハ大和国西大寺にありし由緒鐘銘ハ信長記拾遺に委し 其由縁を祈む豊臣丹の主方ハ坊官下間氏にあり 唐門 南の築地長塀にあり此門ハもと豊国社にありしとなり人物走獣等の彫物荘厳を尽して希代の名物也 虎間 四方に虎を画 浪間 天井に波を画南の方に車寄せあり 聚楽亭よりうつされしとそ 対面所 大広間ともいふ 絵ハ長谷川等漢の筆なり前に能舞台あり 白書院 小広間ともいふ画ハ右に同筆なり 前に能舞台あり 黒書院 画ハ狩野探幽の筆なり 其外関雎殿 滴春館 永安館 桃仙館等の殿舎高閣多しといへとも繁きゆへここに略す 大仲居基所をいふ 伏見城にありしをうつされしとそ入口の唐破風に大黒天の像あり三ツの俵を踏 滴翠園 集会所の東にありて名区の十勝あり 高楼を飛雲閣と號す 久代秀吉公の時聚楽亭にありしを此所へうつされしと云へ

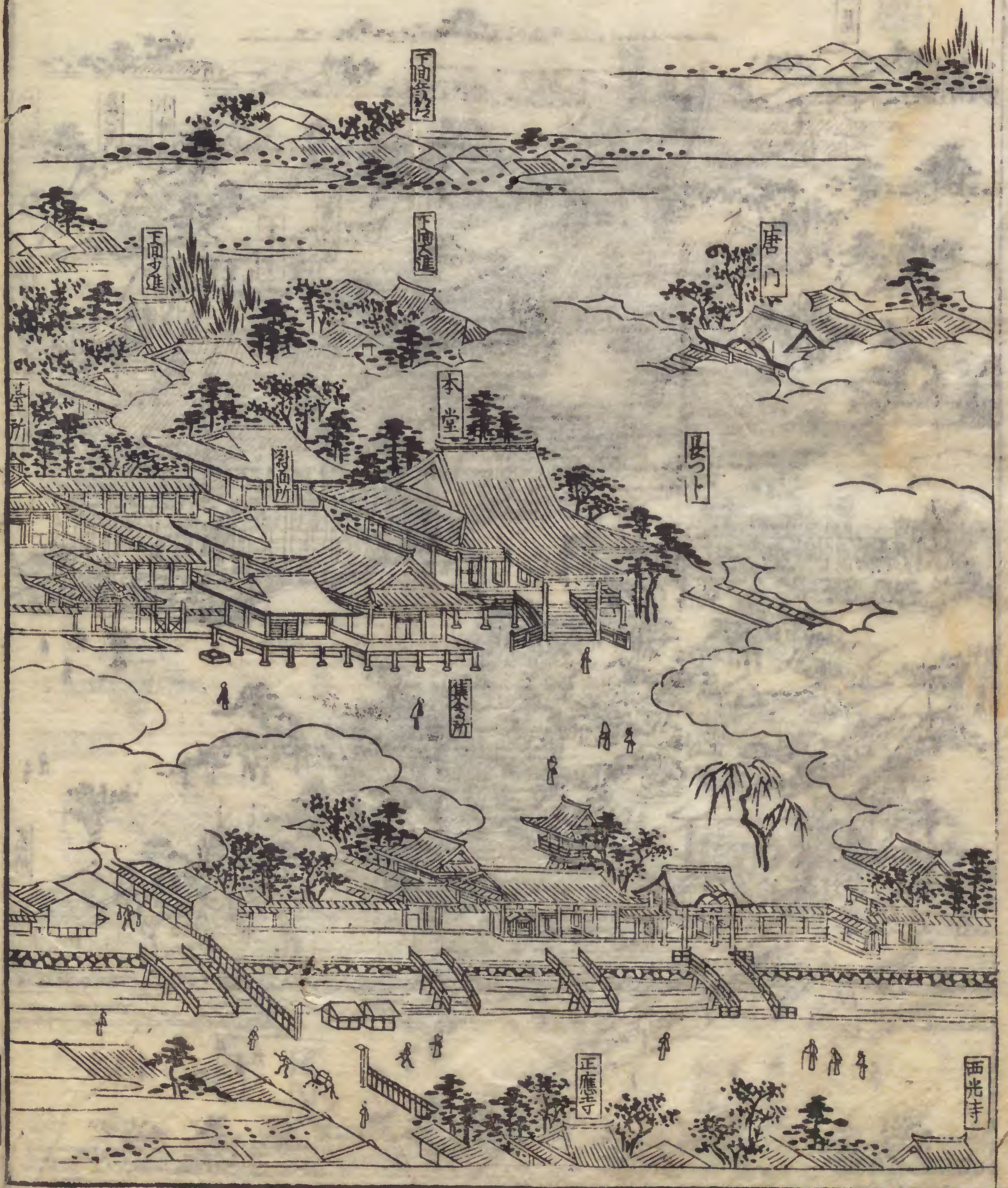
本願寺
永安館
花畑
阿弥陀堂
物見
大仲居
小仲居
白書院
本堂
対面所
虎の間

九條関白尚實公の御筆也閣上の画は霞に富士中閣の画は三十六哥仙とも又古法眼元信の筆也下を詔賢殿といふ飛雲閣の記は殿中の東にかゝる十六世湛如上人の御作にして當御門主法如上人筆を染給ふ池は高樓を巡りて常に船を浮むまた滄浪池といふ龍背橋を渡りて踏石場あり此邊櫻木数品あり胡蝶亭の傍には夜光石あり嘯月坡は池の巡りの坡をいふ黄鶴臺は高閣の西にあり御湯殿あり醒眼泉は一名古醒井といふ洛陽七井の其一なり當新御門主文如上人の碑の銘あり艶雪林には梅花多く青蓮榭は茶亭にして又澆花亭ともいふ簡文が遊し華林園に同うして鳥獣禽魚おのつから來つて人に親の芳園なり

常樂寺 西本願寺のむかひにあり 本尊阿弥陀佛は春日の作也 立像長弐尺余 開基存覚上人 本願寺三世覚如上人の嫡子也 此人聰明叡智にして顕教を玄智僧正にうけ密教を経恵僧正に学びその奥旨を悟り且詩歌を善して多く撰著せり當寺初は大和通に営し其後洛東今小路に遷され常に常楽臺と称し天正十九年此地にうつる

興正寺 西本願寺の南に隣る 本尊阿弥陀佛は安阿弥の作也當寺の初は宗祖親鸞聖人四十歳の時山科の郷中に造営し興正寺と名付け高弟真佛上人に附屬したまふ其後今比叡竹中庄汁谷にうつし後醍醐帝の御時仏光寺と改む 委くは巻首仏光寺の所に出 十四世経豪上人本願寺蓮如上人を帰依し仏光寺を出て新に一堂を建て旧号を用て興正寺と称す 十七世顕尊上人の世永禄十二年に門跡となり天正十九年此地にうつる

興正寺



東本願寺ハ烏丸七条の南にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして開山より第十一世顕如上人の嫡子教如上人慶長七年関東の 台命を蒙りて六町四方の寺地を賜り新に御堂をいとなミ東本願寺御門跡と称し宗祖より十二世の血脈を相続し本堂ハ親鸞聖人自作の像を安置し坐像にして長ヶ弐尺八寸余ありしを此像いにしへ此別院播州英賀寺にあり 台命によつて当寺へ遷し脇壇ニハ前住大僧正其外歴代の畫影を安し餘間にハ九字十字の名號をかく開山聖人の筆なり阿弥陀堂の本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作立像にして長ヶ三尺許脇壇ニハ聖徳太子法然上人其外三朝六高僧の畫像を安し大門本堂の前にあり階上ニ釈迦弥勒舎利弗を安置し菊門大門の北にあり初ハ秀吉公の壮麗にして伏見城にあり双の扉に菊花の大きなる金を鏤め花飾をなして洛中の美観なり阿弥陀堂の門これも伏見城よりうつし世の人日暮の門といふ撞鐘堂伏見城中の井戸屋形なりといふ玄関の式臺摘ミして長七間幅三間の一枚板也寝殿大広間と号す西ハ楽の間小寝殿小広間といふ狩野山雪の筆白書院黒書院の間小鷺の間あり能舞臺ハ集會堂の西にあり其外殿閣堂舎等の花飾ハ悉く中にして佳境に勝まつて繁なるを以て古人も略す東殿今の舎閣屋舗なりハ 台命によつて境地を賜りて東本願寺の別館となる舊跡所なり

本堂
阿弥陀堂
役所
茶所

墓所
寝殿
白書院
鷺の間
東よせ
大門
石井
下間

東殿

東本願寺別荘なり俗には百間屋敷といふ

河原院の旧跡にして池塘の出島に九重塔あり是則融大臣の古墳なりといふ又此所に融公の社あり
墳の隣地下寺町万年寺　池水は東の高瀬川より流れて常に浴々たり水戸を獅子口
ふる川とよぶなりといふ
しかし臨池殿の庭は小堀遠州の好なり風光奇にして真妙なり

炬火殿は七條鴨川の西にあり祭所倉稲魂命と風神を併せ祭る天智帝の勅願也
又稲荷の祭礼の日神輿臨幸の時七條河原に松明を照し神輿を迎ふるなり
此社の舊例にて故に名とせり　當社は舊弘長二年二月神託によりて七條の南東洞院の東に建立し其後應仁の乱後鴨川の西七条の北に遷し宝永八年今の地に遷す

家集　いなりの祭日

稲荷山みねは焼しもまつりてそ非のともしひにけり　貞徳

金光寺は七条間の町にあり當所にある七條道場と称し時宗にして本尊は阿弥陀仏を安置也
勝壇に一遍上人の像あり　此上人の俗姓は伊豫国河野七郎通広が息なり　別府通広が妾二人碁盤を枕として臥たりしかの両の髪蛇と化して頭をまとひ闘ふ
通広これを見て太刀をぬき剣をぬいて悉くに斬られり妄執輪廻を観察して不嚢乃僧となる時に建長年中也始は台教を学び又熊野に詣で権現の示現を蒙り四条にて
文をさづけられより時宗と改む　舊此地は佛工法橋定朝が宅之後に上人に寄附しけるとそ
六十万人決定往生の札を弘む

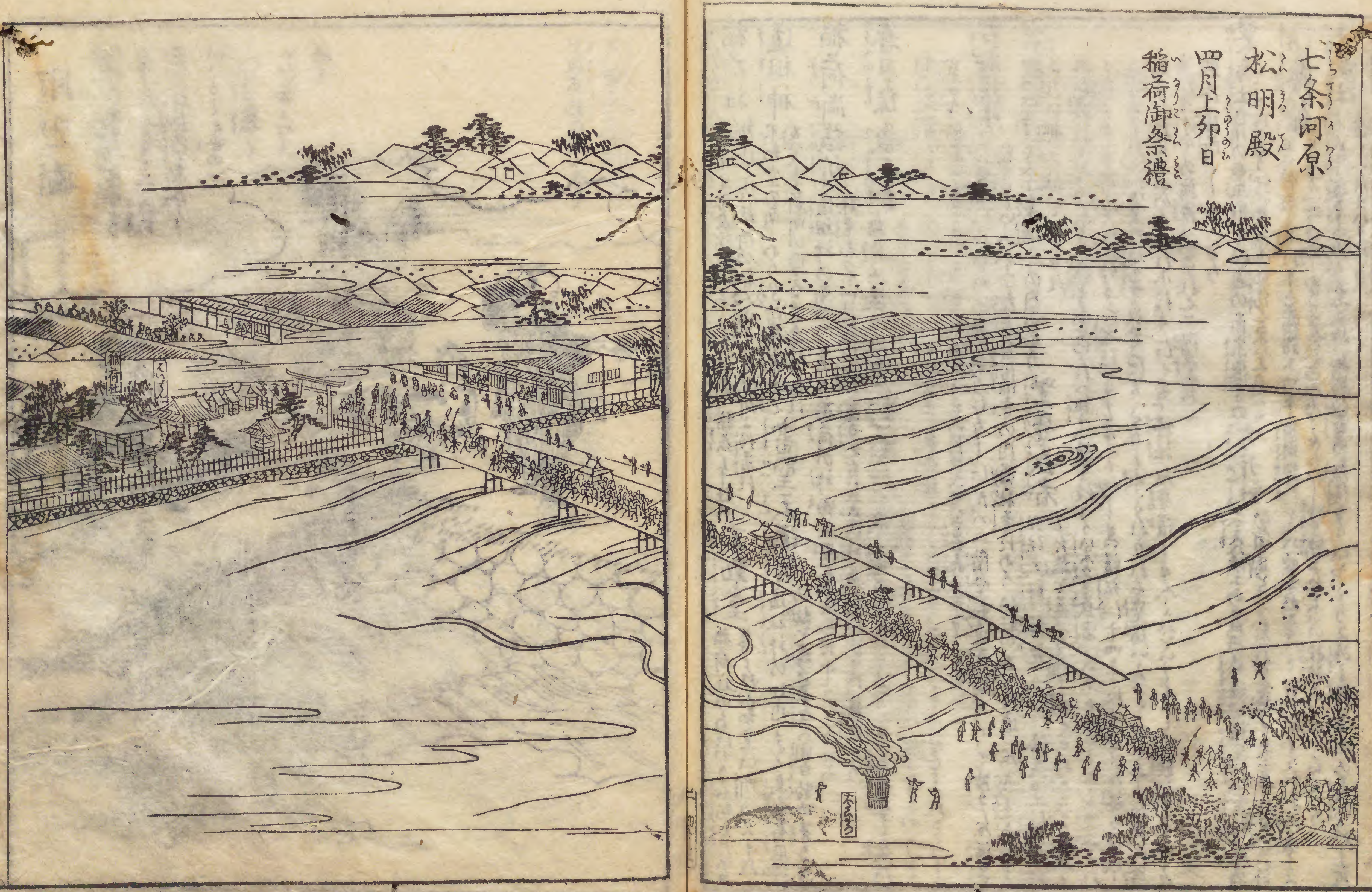
歓喜光寺は九條烏丸にあり本尊観世音は慈覚大師の作なり　洛陽観音巡りの其一なり

宇賀社は九條の東にある祭所宇賀神也此所の東西の径を宇賀辻子といふ

藪内紹智の家ハ西洞院小川の中よあり。其祖剣仲紹智ハ千利休の高弟なり。附
師に向つて曰、秀吉公の寵余人に超ゆ。遠き慮あれバ近き害なからんと諫しかバ
利休甚不興にして紹智を退られしが、大徳寺の三玄院に寓居し、利休の滅後洛の紫
竹に住し専ら茶道を行ふ。其後鷹司通（今の下長者町なり）新町の西にうつされしより本
願寺御門主良如上人の招によりて今の地に住せり。故に茶道の下流と称して利休
嫡傳の正流なり。小堀遠州の姉婿なり（大坂御陣の時此家より遠州出陣にて　古へ此茶室列の八ッ窓と號る）

芹根水ハ堀川通生酢屋橋の南にあり（近年書家烏石葛辰活水と井筒屋入て信ずに　蕣根水の縁となりて八分字に書して石面にあり）
彫刻せし公卿の詩ならびに其序文に曰
源融公むかし此邊に書院たりし風景を愛し、既に今もこの竹林に
ある所において奥州より賀への塩竈の気色をうつし、汲みのありさまを
移しよりして其附屬宅の用にさうしめ、やがてそのめぐく清水湧出て
絶せぬハ知てこそのくぬ霊水なりと石檻を捨して名蹤乃
所以を公にせんとす。今附その資を喜捨して鳥石先生に乞て募
アそ任にこれ、諸君子其事皆善として文藻に属まてそ
寛雅公ハ轉法輪殿の御子にて隨自意院親王御猶子にて醍醐報
恩院に住持しのちに大僧都法印なり。先生の御作なれバ御作なき
きしなれバ公卿の和歌繁多なれバ略之

稲荷社 油小路七條通の南にあり。此所稲荷本社の勧請の所の社人田中氏此所に住居す
不動堂 稲荷社のむかしにあり。不動堂の旅所なり。尊ぶ故に不動堂此所の名とす
道祖神 不動堂の南にあり。所祭猿田彦命也。古ハ五条新町の西にあり首途神と称す
書聖天満宮 道祖神の社内にあり。烏石葛辰碑の銘を建る。篆字ハ園白駒の筆なり
稲荷御旅所 道祖神の南二町にあり。稲荷の神輿五座毎歳三月中の午の日に神幸あつて四月初の卯の日還幸す。古ハ五座の神輿所々に別て御旅所あり
春日森 蔵王森 稲荷御旅所の南にあり。由来不詳
寛算石 蔵王森の南にあり。此所寛算供奉の又乃遺跡なり。寛算ハ平家物語に曰、七條院の御目にて御党をしてありしと
其霊雷となりて此地に堕る。寛算供奉か霊といひ、長明無名抄に云、六月廿六日ハ寛算が日なりとぞ
古御旅所 八條坊門金替町の南にあり。むかし此所ハ二階堂観世音ありしに
稲荷としての旅所。今此観音ハ泉涌寺の内悲田院にあり
いにしへ此寺も今泉涌寺の内にあり
梵釋寺の釋迦佛を安置す
崇守長者 弘法大師縁起に曰、空海入京に際して福子
といふ君ハいかなる人ぞとあやしみ給へバ、都八條に住る崇守長者とこそ
も都にかゝる佛法を好む人ありと給はく、其後弘仁十四年に東寺を賜り住職
させ給ひし二階堂も崇守長者はかりかしか申されけれど空海いろいろと
にもとづけるにあらハ往すしても我が佛法を守護し給へと社といふもと自額に書てまつりし
あしらかへ今の稲荷にまれし二階堂なり
則御旅所としたまへり
粟嶋社 堀川の西生酢屋橋通の南宗徳寺の内にあり。紀州粟嶋の勧請なり。毎年三月三日
古井社 大文八條にあり。此所を傳曰、淡路羅生門に金札を建る
此所馬を停るにより故に名とす。實記不詳
滑盛の館 西八條殿と号れ平家物語に日平相國禅門とぞ八條大臣といひ八條より北の坊城より西の方一町の亭にむかしの入道のせられし曉焼亡の棟数五十余にあまれり
若宮社 大文中道寺にあり。所祭ハ六孫王経基所住吉の勧請なり。此所に文治年中に顛城町の春日神あり
祭ハ六月廿八日なり


七条河原
松明殿
四月上卯日
稲荷御祭禮
稲荷社
てんじん
たいまつ

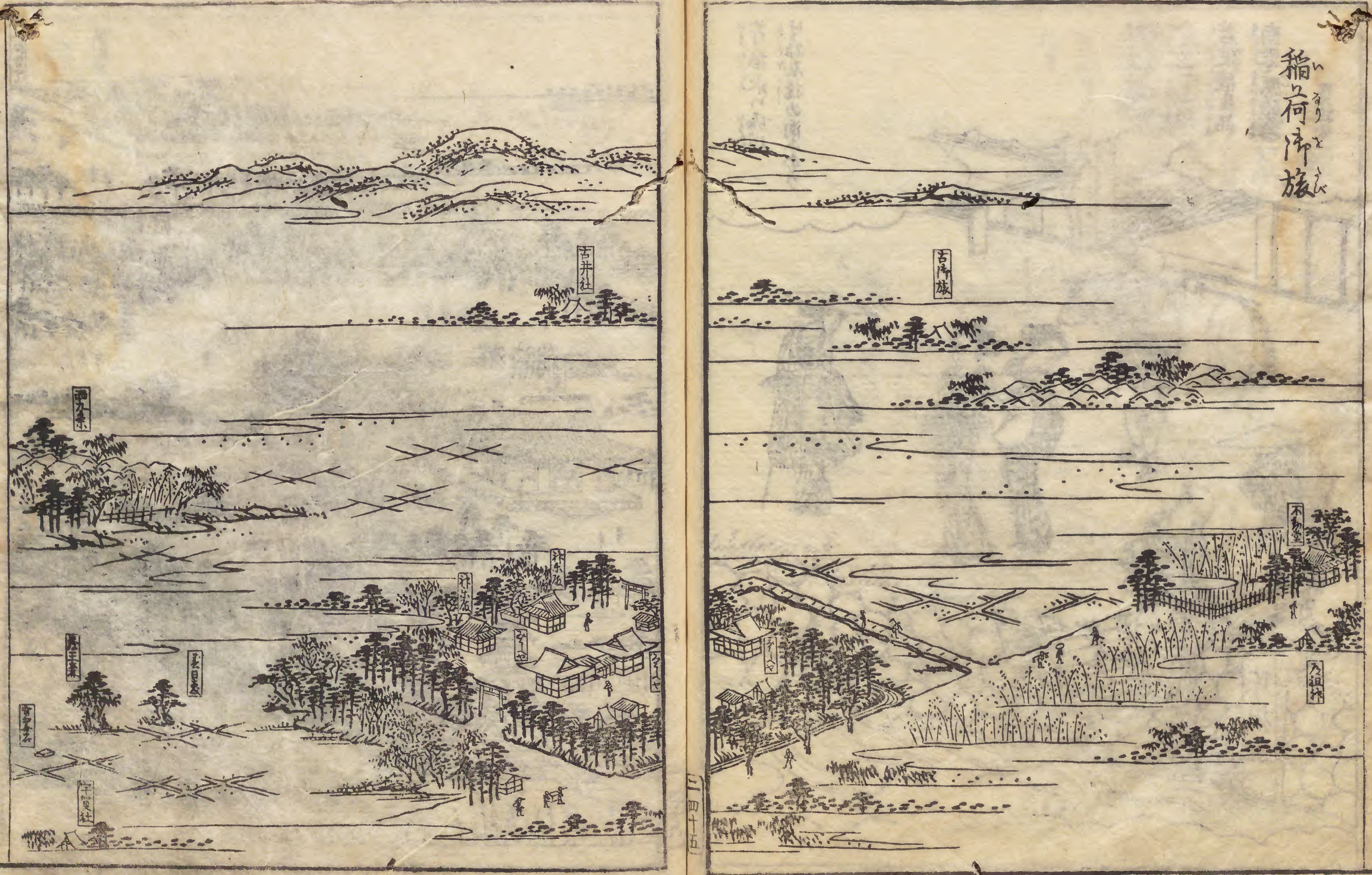
月見橋

堀川の東生洲屋橋より
ゑぐしの所なれバ信濃
國更科郡鏡臺山より
似たるこそ世の
人月見橋と
いひならハし
けり

芹根水ハ堀川
生洲屋橋の南にあり

融公千載宅
今見石泉清
若使陸生品
南零遜鏡名

寛雅公


稲荷御旅
古井社
古御旅
不動堂

東寺（とうじ）

貞純社

遍照心院
神廟
六孫王社
五所社
佛殿

八幡山教王護國寺秘密傳法院 東寺又左寺とも號す 大宮の西八條の南にあり眞言宗の源にして開祖ハ弘法大師舊此地ハ大内裏の鴻臚館にして来朝の賓客を饗応之漢朝の鴻臚館を不空三藏に給ひて精舎と営し其例に准じて弘仁四年左寺を空海に給ひ右寺を守敏に賜ふ称弘法大師ハ讃州多度郡屏風浦の産にして光仁帝寶亀五年に誕じ給ひ十八歳にして大学に至り志佛経にありて遂に出家して延暦十四年東大寺の檀にのぼり具足戒をうけ名を空海と改む霊夢によりて和州高市郡久米道場の東塔の下にて大毘盧遮那神變加持経を得られ文義暁しがたくされバ延暦廿三年五月に入唐して唐の貞元廿一年二月十一日青龍寺の慧果阿闍梨に謁しかの経の奥儀眞言秘密をはじめ同年十月に帰朝して傳来の密法を弘むある時嵯峨帝勅ありて内裏に於て諸宗の名僧とたのみ空海にめんしてかの所の宗義を論ぜさせ給ふに空海の曰我宗ハ大日神變の眞言一旋阿字を観ずれバ即身成佛をとげて諸宗一同にこれをやぶりて議論おさめらるかれハ帝空海に即身成佛の志をいたすべしと勅ありけれバ則五鈷三摩地

觀に入忽首より五佛の寶冠を出し身より五色の光明を放ち面貌金色にして毘盧遮那佛となる帝ハ御座をおりてらいはい諸宗の僧ハ合掌して地にひれふしけり議論おわりぬしバ宗風日本に弘まる弘仁七年に紀州高野山を得て金剛峯寺を建立し仁明帝御宇承和二年三月廿一日六十二歳にして高野山に入定し給ふ其後延喜廿一年に弘法大師と謚を宣下しける

日本に生死不思議の人二人あり生ありて死なきハ空海死ありて生あるハ天満神生も死もなきハ人丸なり

金堂 本尊ハ薬師佛脇士ハ日天月天あり焼失の後豊臣秀頼公の再建にて東大佛殿の模形なり **講堂** 本尊ハ大日如来脇壇に金剛菩薩五大尊四天王梵天等を安置す

食堂 本尊ハ千手千眼観世音聖寶僧正の作なり脇士ハ地藏毘沙門天毘沙門天ハ羅城門の楼上に有しを安置して地藏あるハいふ也へ西寺にあり **五重塔** 四仏を安置す

夜叉神 いふ也へハ食堂の門に安置す今礎石あり左右の小堂に雌雄の夜叉神を安置す大師の御作なり

灌頂院 秘密灌頂の所なり

焼失の後御當家の再建なり此塔下より廿南の方へ傾くされに大師かの方に池を堀て其傾を直さる

八幡宮 大師神影を拜して彫刻し給ふ **八嶋社** 當寺建立以前の鎮守なり故に地主の神とぞ

寶藏 大師の法衣を藏む **瓢簟堀** 宝藏の南の池なり瓢簟の形なり

遡りに池あり **南大門** 二階の楼門也金剛力士の像

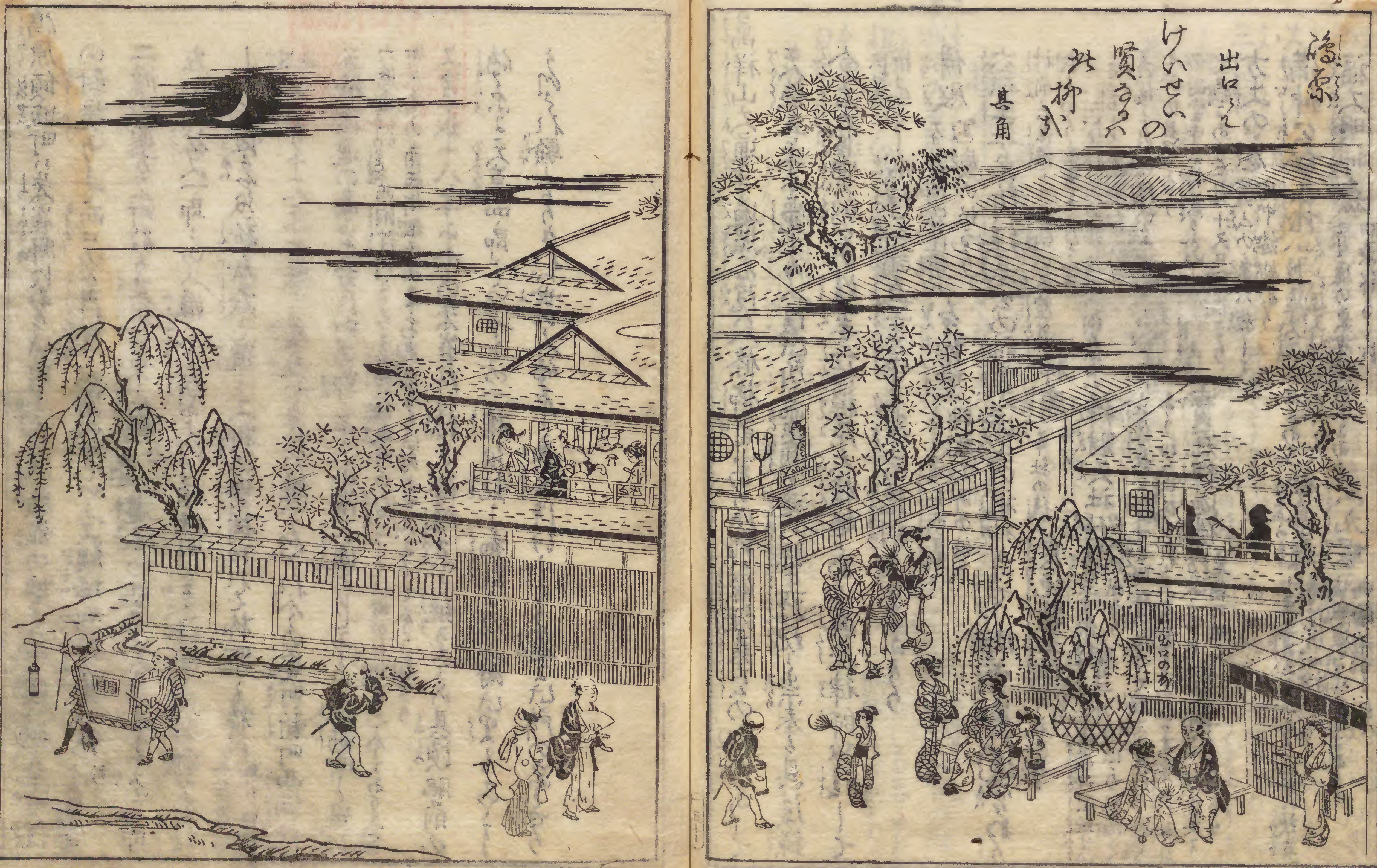
安置す東の門を **慶賀門** 西の門を **蓮華門** といふ大師入定のとき此門より出させ給ふとぞ

西ハ湛慶の作なり

猫瓦 巽の方の築地の上にあり此築地造営の時ハ摂州京附奉行なにがしといふ人作る

西院開祖弘法大師の影を安置す 法眼康勝の作なり後堂にハ大日不動をおさむ
大黒天 大師の作なり 西の院の傍に安す 愛染明王 四天王 般若菩薩ハ大師の作之 宝持坊に安置す 五寶石 後堂の白砂にあり 一名不動石ともいふ
三鈷松 西の院のまへにあり大師唐土より帰朝のとき秘密教相應の地あらバ此三鈷止るべしと空中に投げ上給ふ後此所の松枝に止りたり故に名づく
とげ三葉の松なり 松子房松 西の院の乾にあり
楼雲記ニ曰 元弘三年五月六波羅の攻落れ越後上山へ進れ後醍醐天皇則入洛あり播州書写山より新田義貞より小條高時滅亡のよしを注進ス 楠正成兵庫にて迎奉る勅願によりて東寺へ行幸松子房にて此松の下に向のよし叡奏しそ前大僧正頼意が詠に
植置しむかしやちよの契りなるへれ御幸をまつ風の声
羅城門の舊跡ハ朱雀通 今の千本通なり 四塚にあり此門ハ桓武天皇平安城造営の時初て建らるゝところ大内裏の南面にして外郭の惣門なり 楼上に毘沙門天を安置すこれ傳教大師の作なり
今東寺の鎭講堂にあり
梅城録ニ曰 都良香羅城門を過る時 氣霽風梳新柳髪 と詠じされバ楼上に声ありて 氷消浪洗旧苔鬚 とつけゝりこれ後菅原の作なりとてこれを詠じられけれハ自歎しかして下の句ハ鬼神のなりしと作られける

萬祥山大通寺遍照心院ハ八條櫛笥にあり此地ハ源經基公の殿舎にして天徳五年に薨じ給ふ後此所に霊廟を建六孫王権現と崇奉る其後鎌倉右大臣實朝公の後室二位禅尼大檀越となり真空律師を請して開山とし戒律三論真言等を兼学の梵刹となれり
佛殿 本尊阿弥陀佛ハ運慶の作なり 本地堂 本尊不動明王ハ興教大師の作
六孫王社 祭所ハ經基公の神霊源氏の祖神にして御當家の造営なり
社前にハ法候より奉納の石燈籠数多あり 祭九月十一日 神廟 本社の後に 貞純親王社 本社の巽にあり
神龍池 社前の池なり例祭にハ放生会あり 辨財天社 長さ一尺五寸余弘法の作なり 誕生水 源満仲公誕生の産湯に汲し水なり洛陽の名水七井の其一なり 此水の上に阿弥陀佛 立像長二尺五寸安阿弥の作にして親鸞聖人の持尊なり初ハ山科にありしを安置すると佐々木定綱の時当寺に持来るといへり
今門内の寶冠釋迦佛 方丈に安す 實朝公の影 定朝の作之 方丈の宝蔵にあり二月十五日開帳なり
方丈の庭 庭中の盧山の景を摸して縫殿作なり
満仲公誕生地 八條通大宮の西にあり今六孫王の御旅所といふ 歓喜森 七条の末朱雀の東にあり此所ハ歓喜寿院の旧跡なり
福大明神森 壬生通の東揚梅の小にあり 人丸塚 坊城通る辻の南にあり 由来詳ならず 由緒詳ならず



嶋原
出口の柳
けいせいの賢なるハ此柳かな
其角
出口の柳

嶋原傾城町ハ朱雀野にあり此所上古ハ鴻臚館の地なり中頃ハ観喜寺院の封境にして西口の畠ハ字を堂の口といふ又傾城郭ハ万里小路（今ハ柳馬場なり）二條の南方二町なり其先ハ東山殿義政公遊宴の地なり天正十七年原三郎左衛門林又一郎といふ浪人上訴によりて傾城町を免許せられ一の郭をひらきしなり地名を新屋敷と號し又柳の雙樹ありしかば柳町とも称じ（今の出口の柳ハ此遺風也）其より十二年を歴て慶長七年に六條へうつされ今の室町新町西洞院五條橋通の南にて方三町の郭之中に小路三通あり上より三筋町と號じ（六條通今の魚棚西洞院川にかゝる石橋ハ傾城町の入口にして此附かけ初しと今にあり又町又条の南西側臨延の居宅異風なり此時の志八にして今に存せり）又寛永十八年に今の朱雀野へ移され嶋原と號るよしハ其頃肥前の嶋原にて天草四郎といふもの一揆を起し騒乱にあふが時此里もさわしくうつされ騒しかりければ世の人嶋原と異名付けしより遂に此所の名となせり

国立公文書館
National Archives of Japan